

# 銀杏ノ木遺跡

(高知県長岡郡本山町)



1999. 3

本山町教育委員会

# 銀杏ノ木遺跡

本山町埋蔵文化財調査報告書第9集

1999. 3

本山町教育委員会

巻頭カラー



ST 1 遺物出土状況（西から）



ST 1 完掘状況（南から）

## 序

本山町は、四国のほぼ中心部、高知県の最北部に位置し、近隣の嶺北地域ではもっとも遺跡の集中する地区であります。町の殆どは、山林で占められていますが、吉野川上流域では唯一河岸段丘の発達しているところであり人々に生活の場を提供しています。

本町は、「花のまち」であると同時に「史跡のまち」もあります。特に西日本屈指の縄文遺跡として脚光を浴びた「松ノ木遺跡」や、西日本ではおそらく初めてであろうと言われる「長億寺跡遺跡」の多宝・塔など、この付近に数珠状に連なる遺跡の存在がそのことを雄弁に物語っています。

今回の発掘調査で西見当Ⅰ式の弥生土器が発見されたことにより、この地域は瀬戸内と高知平野を結ぶルートとして、はるか昔から交通の要衝として重要な役割を果してきたことが判明しました。

本山町は自然という宝物とともに、文化や歴史にまつわる素晴らしい見所を持つ町です。そして数多く分布している遺跡には、歴史を築いてきた先人たちの営みがしっかりと刻み込まれています。

これら残された貴重な文化遺産を保存し、後世に残していくことが私たちの使命であると考えております、これからも現代を知り、未来を展望していく上での羅針盤として大切にしていきたいと思っております。

終わりになりましたが、発掘調査・報告書作成にあたって全面的なご協力を頂いた出原恵二氏をはじめ、(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター、土佐町教育委員会、発掘作業に従事して頂いた皆様など関係者各位に対しまして、ここに厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

本山町教育委員会

教育長 和田 聖 寛

## 例　　言

1 本書は、本山町教育委員会が平成8・9年度に実施した埋立て予定地に伴う銀杏ノ木遺跡の発掘調査報告書である。

2 銀杏ノ木遺跡は、高知県長岡郡本山町本山字東畑に所在する。

3 発掘調査は、平成9年2月に（財）高知県埋蔵文化財センターの協力を得て試掘調査を実施、第1次調査を平成9年3月3日～平成9年3月27日（平成8年度）まで、第2次調査を平成9年5月6日～平成9年7月25日（平成9年度）まで実施した。第1次調査は約1400m<sup>2</sup>を第2次調査は約700m<sup>2</sup>を対象として行った。

また、発掘調査及び遺物整理・図面作成作業、報告書作成にあたっては出原憲三氏（高知県文化財団埋蔵文化財センター 調査第3班長）から多大な協力を得ることができた。記して感謝の意を表したい。

4 調査体制は以下の通りである。

調査員 筒井敬二（土佐町教育委員会主幹）

調査員及び事務担当 渡邊徳仁（本山町教育委員会主事）

5 本書の編集は、筒井・渡邊が行い、第I～IV章は筒井と渡邊が、第V章は1と3を筒井が、2を出原氏が執筆した。

6 遺物整理・図面作成等の作業においては、下記の方々の協力を得ることができた。心よりお礼申し上げたい。

埋蔵文化財センター 山中美代子 田村美鈴 大原喜子 松木富子 浜田雅代

7 発掘現場作業員は下記の方々である。暑さの中、誠身的に発掘作業に従事してくれたことに対して心より感謝の意を表したい。

青木房 石川真一郎 石川春子 伊藤佐代子 今西和秀 川村幸 川村貞子 曽我部ツヤ子  
高橋石男 田上佐恵子 樋口佳伯 嵐山みさ子 内藤照光 内藤住江 村山志賀乃 山中査智子  
竹田瑞男 坂本信彦 山原宇頭 古田米子 今西春子 今西小枝子 中野内愛子 石原博文  
共運工業有限会社－石川紀夫 秋山純一

8 当遺跡出土資料は本山町教育委員会が保管し、遺跡の略号は96-49MGと97-11MIである。

9 最後に発掘調査の実施にあたって、土佐町教育委員会・株式会社嶺生開発・本山町役場建設課・本山保育所の皆様に埋蔵文化財に対する理解と協力をいただき当調査を進めることができたことに心から感謝したい。

## 本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過 .....	1
第Ⅱ章 遺跡周辺の歴史的環境 .....	2
第Ⅲ章 調査方法 .....	4
第Ⅳ章 調査の成果 .....	5
1. 基本層準 .....	5
2. 弥生時代の遺構と遺物 .....	9
(1) 積穴住居 .....	9
ST 1 .....	9
ST 2 .....	10
ST 3 .....	15
(2) 土 坑 .....	16
(3) ピット .....	19
(4) 包含層IX層上面からの集中出土遺物 .....	20
3. 中世の遺構と遺物 .....	21
(1) 土 坑 .....	22
(2) ピット .....	25
4. 包含層出土の遺物 .....	26
(1) 縄文時代 .....	26
(2) 弥生時代 .....	26
(3) 中 世 .....	26
第Ⅴ章 まとめ .....	31
おわりに .....	35

## 図 版 目 次

Fig. 1 銀杏ノ木遺跡の位置と周辺の遺跡	3
Fig. 2 調査区位置図	4
Fig. 3 調査区C-Dセクション基本層準	5
Fig. 4 調査区A-Bセクション基本層準	6
Fig. 5 検出遺構全体図	7~8
Fig. 6 ST 1 平面及びセクション図	10
Fig. 7 ST 1 出土遺物実測図	11
Fig. 8 ST 1 出土遺物実測図	12
Fig. 9 ST 1 出土遺物実測図	13
Fig.10 ST 2 平面・セクション図及び出土遺物実測図	14
Fig.11 ST 3 平面・セクション図及び出土遺物実測図	15
Fig.12 SK 2・4 平面・エレベーション図及び出土遺物実測図	17
Fig.13 SK 5・7 平面・エレベーション図及び出土遺物実測図	18
Fig.14 SK 17・24, P 56平面・エレベーション図及び出土遺物実測図	19
Fig.15 IX層上面からの集中出土遺物実測図	20
Fig.16 SK 10・13・21平面・エレベーション図及び出土遺物実測図	21
Fig.17 SK 1・3・6・8・9・11・12・14・15平面及びエレベーション図	23
Fig.18 SK 16・18・19・20・22・23平面及びエレベーション図	24
Fig.19 P 11・38・52平面・エレベーション図及び出土遺物実測図	25
Fig.20 包含層出土遺物実測図	27
Fig.21 包含層出土遺物実測図	28
Fig.22 包含層出土遺物実測図	29
Fig.23 包含層出土遺物実測図	30
Fig.24 西南四国における縄文時代早~前期のトロトロ石器と出土遺跡分布図	31

## 表 目 次

Tab. 1 ST 1 ピット計測表	10
Tab. 2 ST 2 ピット計測表	14
Tab. 3 遺物皆無の土坑計測表	22

## 写真図版目次

P L 1	調査前風景・試掘調査トレンチ設定状況	49
P L 2	調査区南壁A-Bセクション	50
P L 3	調査区東壁C-Dセクション	51
P L 4	ST 1 検出状況（西から）・ST 1 発掘作業風景	52
P L 5	ST 1 遺物出土状況（北から）・ST 1 完掘状況（南から）	53
P L 6	ST 1 遺物出土状況（11・13・14・28・39・41）	54
P L 7	ST 1 と SK 4 の位置関係・SK 4 遺物出土状況	55
P L 8	ST 2 セクション（西から）・ST 2 完掘状況（南西から）	56
P L 9	ST 3 完掘状況（南西から）・同（北東から）	57
P L10	SK 1, 3, 5 完掘状況・SK 6・SK 7 遺物出土状況・SK 13セクション	58
P L11	SK 15, 16, 18, 20, 22, 24完掘状況	59
P L12	包含層IX層上面集中出土遺物出土状況・同（84）・同（90）・同（86・88）	60
P L13	調査区全景（北東から）・同（南西から）	61
P L14	ST 1（4・7・11・13・14・15）出土の遺物	62
P L15	ST 1（16・19・20・26・27・34）出土の遺物	63
P L16	ST 1（35・36・39・40・41・43）出土の遺物	64
P L17	ST 2（51・52）・SK 2（60）・SK 4（61・64）・SK 7（75）出土の遺物	65
P L18	ST 1（2・3・8・9・10・17・23・28）・SK 7（70・73）・ 包含層IX層上面（90）・包含層（100・137）出土の遺物	66
P L19	包含層IX層上面（84・85・87・88・91）・包含層（104）出土の遺物	67
P L20	P 38（99）・包含層（106・107・110・111・122・156）出土の遺物	68
P L21	包含層出土のトロトロ石器（136）・包含層出土の西見当I式土器（154）	69
P L22	石器（石包丁）・同裏面	70
P L23	包含層出土の遺物（青磁・白磁・染付け）・同裏面	71

## 第Ⅰ章 調査に至る経過

銀杏ノ木遺跡は、本山町中心部より西方約700m、本山保育所東側の水田に位置する。近隣の遺跡としては、南方には昭和56年3月に同和対策事業等による土地造成に伴う発掘調査の際、発見された銀杏ノ木遺跡が（のちに今次調査と同時代のものと確認）、またそのすぐ北側には埋蔵文化財包蔵地として知られる高畑遺跡がある。

今回、土木工事によって生じる残土処理場として埋立てが予定されていたこと、将来的には宅地造成の計画があることなどが判明し、埋蔵文化財の包蔵状況を確認するために高知県教育委員会文化財保護室・（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター・工事担当課等関係の協力を得て平成9年2月4日から6日の3日間、埋蔵文化財センター調査第三班長の出原恵三氏の調査指導のもと試掘調査を実施した。その結果、当遺跡の旧地形は西（保育所）から東に向かって傾斜していることが分かった。低位部からは縄文時代のピットが1個、高位部からは弥生後期の堅穴住居1棟が確認された。また、各トレンチからは、縄文・弥生・中世土師器、青磁などが100点ほど出土した。このことから当地点は弥生時代後期を中心とした、縄文～中世の集落遺跡であることが明らかになった。工事が予定通り実施されると遺跡は大きな影響を受けることとなる。そこで、本町教育委員会、工事担当課等で、協議した結果、記録保存を目的とし本格的な発掘調査を行うこととなった。

また、発掘調査体制として土佐町教育委員会に全面的な協力を依頼し、県内では異例の隣接町による共同発掘調査を実施した。

## 第Ⅱ章 遺跡周辺の歴史的環境

銀杏ノ木遺跡のある長岡郡本山町は、四国山地のほぼ中心部、高知県の最北部に位置し、近隣 5 カ町村と共に嶺北地方と呼ばれている。町のほとんどは山林で占められているが、町を南北に 2 分して東流する吉野川流域にあって河岸段丘が発達しているのが特徴である。この流域には松ノ木遺跡、永田遺跡、堀ノ尻遺跡をはじめ多数の遺跡が立地しており、吉野川上流域の遺跡密集地帯を形成しているといつても過言ではない。また本山町は、瀬戸内海と太平洋側を結ぶルートの中継点でもあり、東西・南北からの情報のクロスする地点もある。このような地理的環境が本山町の歴史と文化の場を提供してきたのである、銀杏ノ木遺跡の内容を規定する大きな要因の 1 つということができる。

本山町の歴史は、長徳寺遺跡の調査によって、縄文時代早期にまで遡ることが確認されており、以後縄文時代を通して連続と人々の生活の跡をたどることができる。長徳寺址からは、遺構は検出されていないものの、縄文早期の薦島式土器と、高知県では初出土の人形椎円押型文土器である高山寺式土器が出土<sup>(1)</sup>している。また、2 個の石錘も出土しており、土佐の網漁法が縄文早期まで遡ることが明らかになった。特に後期の松ノ木遺跡は、成立期の縄文土器として著名となった松ノ木式土器のタイプサイトであり、松ノ木式土器と命名された縄文時代後期の土器は、全国的にも著名な土器型式となり、縄文遺跡の希薄な高知県中・東部にあたっては充実した内容をもつ遺跡として重要な位置を占めている。

弥生時代は、中期末から遺跡が分布し始め、後期末～古墳時代初頭に至って飛躍的な増加が見られる。中でも嶺北高校校庭遺跡から凹線文の壺・高杯と大形蛤刃石斧が出土しており、西方の昭和 56 年に調査された銀杏ノ木遺跡からは、竪穴式住居址状遺構、貯蔵穴などの遺構が検出されると共に、ヒビノキ II 式土器併行の銀杏ノ木式土器やこれに伴って打製石包丁などが出土<sup>(2)</sup>している。また堀ノ尻遺跡は、弥生時代末から平安時代にかけて営まれた遺跡であり、8世紀末から 9世紀前半に属する須恵器が主体を占めている。また当町及び隣接する土佐町からは近畿式銅鐸 1 個・中広形銅矛 4 本・広形銅矛 1 本が確認されており、高知平野と共に銅鐸・銅矛の錯綜地域を形成している。

古墳時代以降、奈良時代までは見るべき遺構はほとんど存在せず、当地域の歴史は一旦ここで途切れる。しかし、延暦 16 年（797）に至り吾橋駅が設けられたという記載があり（『日本後記』）この駅を本山町周辺に比定することも可能でこの時期から再び遺跡が分布するようになる。

### 註

(1) 岡本健児他「長徳寺址発掘調査報告書」 高知県長岡郡本山町教育委員会 1977年

(2) 出原恵三・前田光雄「松ノ木遺跡 I」 高知県長岡郡本山町教育委員会 1992年

(3) 岡本健児「銀杏ノ木遺跡の発掘」 高知県長岡郡本山町教育委員会 1984年

(4) 出原恵三「堀ノ尻遺跡」 高知県長岡郡本山町教育委員会 1993年

高知県 長岡郡  
本山町全図

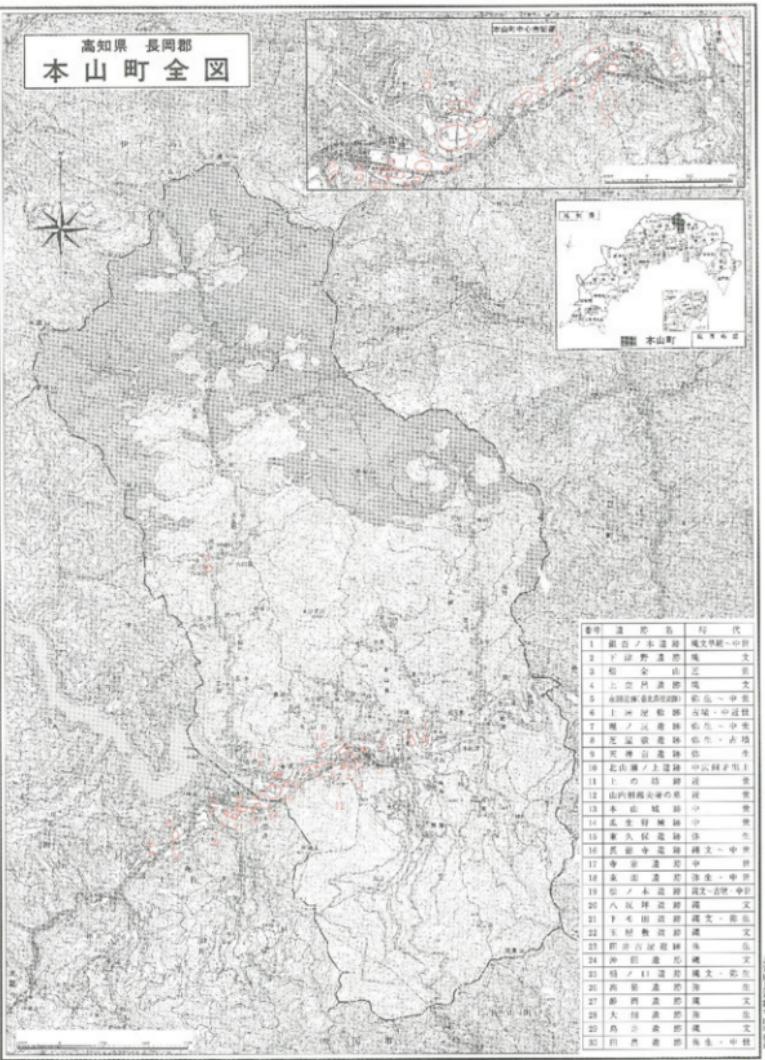


Fig. 1 銀杏ノ木遺跡の位置と周辺の遺跡

### 第Ⅲ章 調査方法

平成8・9年度にまたがる発掘調査になるとの見込みが強かったため、調査区を第1次調査（平成8年度3月3日～平成8年度3月27日）と第2次調査（平成9年度5月6日～平成9年度7月25日）に二分し、傾斜の低い東側から調査にかかるここととした。調査にあたっては、遺物包含層直上まで重機掘削を行い、包含層掘削・造構検出を行った。遺構発掘は手作業で行った。遺物の取り上げ、造構実測は磁北にあわせた任意座標を組み、4m毎に東西方向に西から1・2・3……、南北方向に北からA・B・C……との方眼を組み、それを基準に行った。造構実測、セクションは20分の1縮尺を基本にして実施し、必要に応じて縮尺をかえた。

第1次調査において分布密度は比較的希薄ではあるが、繩文～中世の遺構と遺物が検出された。従つて、残り700m<sup>2</sup>については、長期的な調査が必要と判断し第2次調査を実施した。



Fig. 2 調査区位置図

## 第IV章 調査の成果

### 1. 基本層準 (Fig. 3・4)

基本層準は、調査区南壁のA-Bセクションと東壁のC-Dセクションで観察した。調査地の地面の標高は、西が高く、東に向けてなだらかに傾斜している。このため、堆積土層は、西で薄く、東に行くにしたがって厚くなる。また、南壁A-Bセクションでみると、12~28mのあたりが落ち込み状となっている。Ⅹ層からⅩⅢ層は、その堆積土である。

調査面積が広く、一様にはならないが、基本的な層準は以下の通りである。なお、遺物包含層については、中近世の層に弥生時代の遺物が含まれるなど、純粋な層の形成は認められない。

Ⅹ層：黄褐色シルト質土層。地山である。弥生の遺構検出面である。また、西の部分では、中近世に属するとみられるピットも検出している。

ⅩⅠ層：茶黄色シルト質土層。層厚は24~42cmを測る。調査区の東でみられる。無遺物層である。

ⅩⅡ層：淡灰黄色砂質土。層厚は3~27cmを測る。落ち込み部の堆積土であり、無遺物層である。

ⅩⅢ層：灰黄色砂質土層。層厚は5~18cmを測る。落ち込み部の堆積土であり、無遺物層である。

ⅩⅣ層：淡灰色粘質土層。層厚は3~18cmを測る。落ち込み部の堆積土であり、無遺物層である。

ⅩⅤ層：黒茶灰色粘質土層。層厚は3~12cmを測る。落ち込み部の堆積土であり、無遺物層である。

ⅩⅥ層：赤褐色土層。層厚は3~18cmを測る。無遺物層である。

ⅩⅦ層：黄茶色土層。層厚は3~6cmを測り、1~5mmの小蝶を含む。無遺物層である。

ⅩⅧ層：濃茶灰色粘質土層。層厚は3~24cmを測る。無遺物層である。

ⅩⅨ層：淡茶灰色粘質土層。層厚は3~18cmを測る。無遺物層である。

ⅩⅩ層：濃灰褐色土層。層厚は3~9cmを測る。無遺物層である。

ⅩⅪ層：灰色粘質土層。層厚は6~21cmを測る。無遺物層である。

ⅩⅫ層：灰褐色粘質土層。層厚は6~36cmを測る。弥生時代の遺物包含層である。

ⅩⅬ層：灰黄色粘質土層。層厚は6~23cmを測る。弥生時代の遺物包含層である。

ⅩⅭ層：黄褐色土層。層厚は3~6cmを測り、鉄分の沈着が認められる。中世の遺構検出面である。

ⅩⅮ層：黄茶色粘質土層。層厚は6~15cmを測る。中世の遺構検出面である。また、土層中に弥生時代の遺物の混入もみられる。

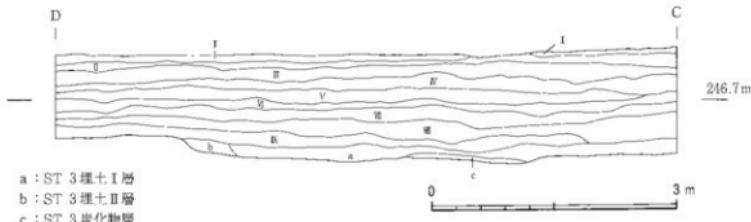


Fig. 3 調査区C-Dセクション基本層準

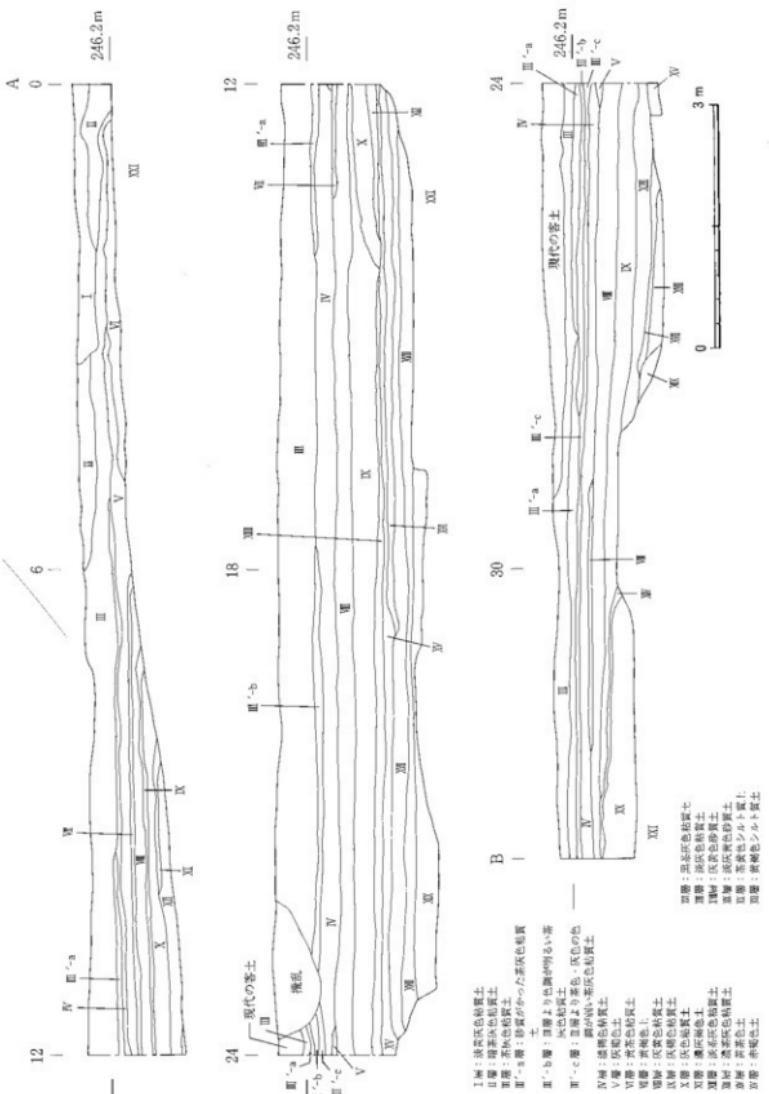


Fig. 4 調査区A-Bセクション基本層準

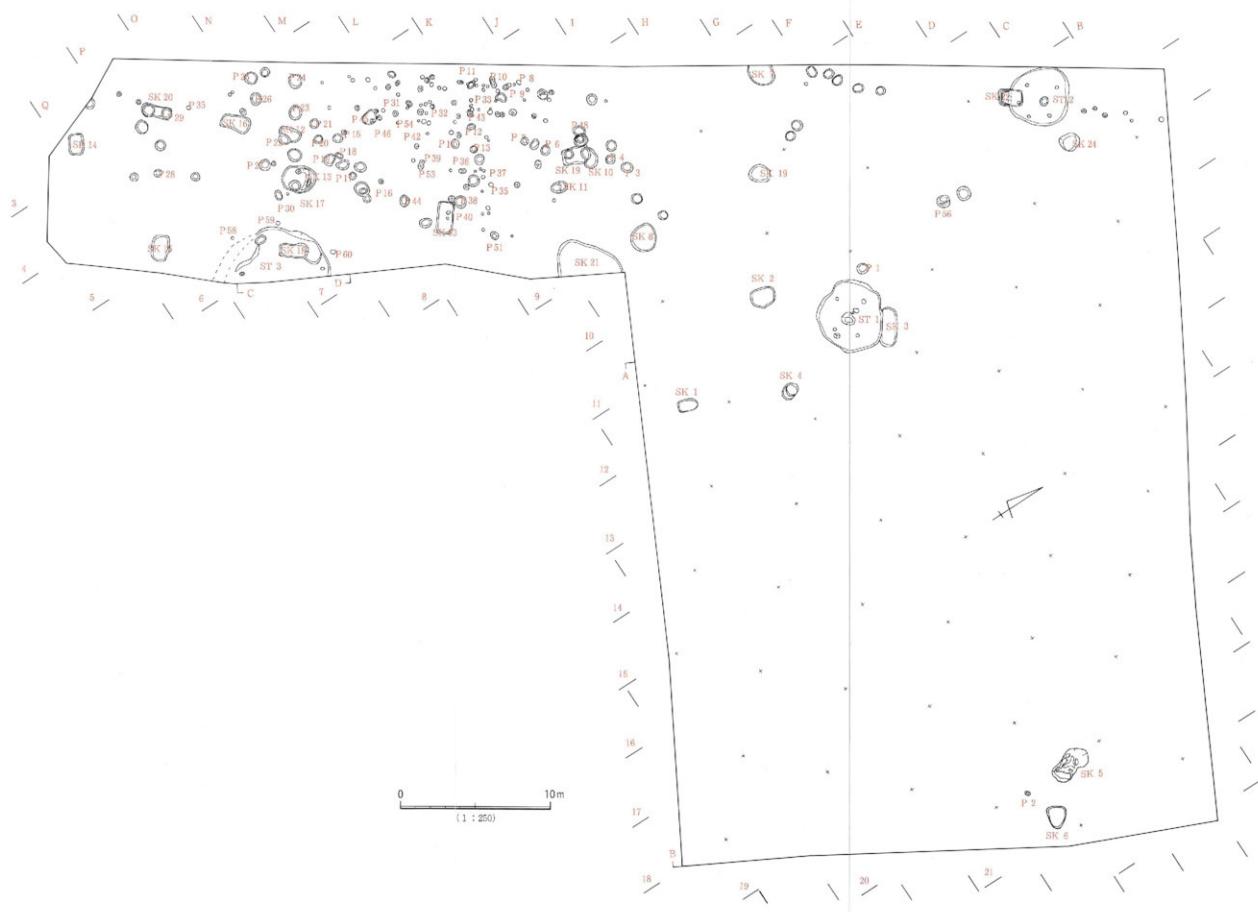


Fig. 5 検出遺構全体図

V層：灰褐色土層。層厚は6～18cmを測る。中世の遺物包含層である。

IV層：濃褐色粘質土層。層厚は3～27cmを測る。中世の遺物包含層で、弥生時代の遺物の混入もみられる。

III' - c層：III層より茶色・灰色の色調が弱い茶灰色粘質土層。層厚は3～6cmを測る。無遺物層である。

III' - b層：III層より色調が明るい茶灰色粘質土層。層厚は3～9cmを測る。無遺物層である。

III' - a層：砂質がかった茶灰色粘質土層。層厚は3～11cmを測る。無遺物層である。

III層：茶灰色粘質土層。層厚は6～50cmを測る。中世の遺物包含層で、若干弥生時代の遺物が混入する。

II層：暗茶灰色粘質土層。層厚は9～30cmを測る。無遺物層である。

I層：淡黃灰色粘質土層。層厚は6～21cmを測る。調査段階ではすでに除去されていた現代の水田耕作土の直下に位置する土層であり、無遺物層である。

## 2. 弥生時代の遺構と遺物

### (1) 積穴住居

ST 1 (Fig. 6・7・8・9)

調査区の中央やや西寄りで検出した積穴住居である。平面形は隅丸五角形様を呈し、一辺が、短いもので2.2m、長いもので3mほどを測る。検出面から床面までの深さは23～45cmを測る。北東壁はSK 3に切られている。埋土は、I：濃灰茶色粘質土、II：黄灰茶色砂質土、III：茶褐色粘質土、III'：黄色粘質土混じりの茶褐色粘質土、IV：濃茶褐色粘質土、V：淡黄色粘質土、V'：淡黄色粘質土（V層より明るい）となるが、I層とII層が主要層準をなす。床面はほぼ平坦で、ベッド状遺構、壁溝ともに認められない。中央ピットはほぼ中央に存在し、橢円形のプランを有するが、北西部の肩が崩れているため、床面からの掘り込み部のプランはいびつなハート形となっている。長軸90cm、短軸60cm、深さ8cmを測る。中央ピット北側に存在する緑色片岩は腰掛けの類とみられる。主柱穴はP 1～P 4の四本柱を想定できる。柱間距離は、P 1-P 2が2m、P 2-P 3が1.8m、P 3-P 4が2.3m、P 4-P 1が1.6mである。

出土遺物は、土器では、壺、壺、鉢、高环があり、石器では、打製石刀、石錐がある。出土遺物中で図示できるものは1～50である。1～13・15～17・19～24・26～33は壺である。このうち底部が出土している14点のうち、上げ底の底部を成すものは、12・13・21・24・26・29～33の10点である。特に12・21・26・30～32は、上げ底の縁部を指頭でつまみ出して成形している。14・18・25・34は壺である。14の外表面は、ハケに加えて、ヘラ磨きが施されている。35～39は鉢である。36と39の底部は、上げ底を成す。40～43は高环である。これらのうち、床面から出土した土器 (Fig. 5にドットで図示) は、壺(11・13・27・28) 4点、壺(14) 1点、鉢(38・39) 2点、高环(41・43) 2点の計9点である。また、住居内ピットP 1より、弥生土器細片が50点ほど出土している。床面及び埋土出土土器の器種組成を口縁部片でみると、その点数は、壺41(72%)、壺8(14%)、鉢6(11%)、高环2(3%)であり、壺が圧倒的に多い。底部の形態に特徴がみられ、平底を成すもの

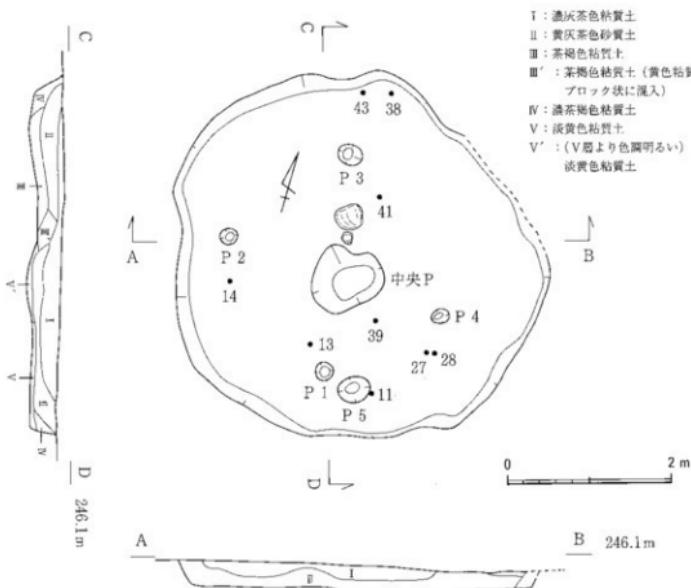


Fig. 6 ST 1 平面及びセクション図

が7点に対し、上げ底を成すものが32点を数え、大半を占める。44~49は打製石包丁で、結晶片岩製である。50は石錐である。緑色片岩製で、長軸方向の両端を打ち欠いた凹みが認められる。ST 1は、弥生時代後期中葉に属する。

#### ST 2 (Fig.10)

調査区の北西で検出した堅穴住居である。径3.8m前後を測り、不整円形の平面形を有する。検出面から床面までの深さは18~27cmを測る。南西部はSK 22に切られている。埋土はI~IV層からなっている。I: 灰褐色粘質土、II: 濃灰褐色粘質土、III: 淡褐色粘質土、IV: 暗灰褐色粘質土、V: 褐色粘質土、VI: 褐色粘質土(炭化物を多く含む)、VII: 黄褐色シルト質土(地山2次堆積)、VIII: 暗褐色粘質土(中央ピットの炭を含む)となる。このうち、I層とIII層が主要層をなす。床面は平坦で、ベッド状造構や壁溝は認められない。中央ピットは中央や北東寄りに存在し、隅丸方形形状の平面形を持つ。長軸60cm、短軸50cm、深さ10cmを測る。主柱穴はP 1~P 4の四本柱が想定される。柱間距離は、P 1~P 2、P 2~P 3がそれぞれ1.9m、P 3~P 4が1.3m、P 4~P

Tab. 1 ST 1 ピット計測表

ピット NO	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P 1	22×20	27	円形
P 2	21×19	14	円形
P 3	30×24	38	楕円形
P 4	22×16	26	不整楕円形
P 5	40×30	8	不整楕円形

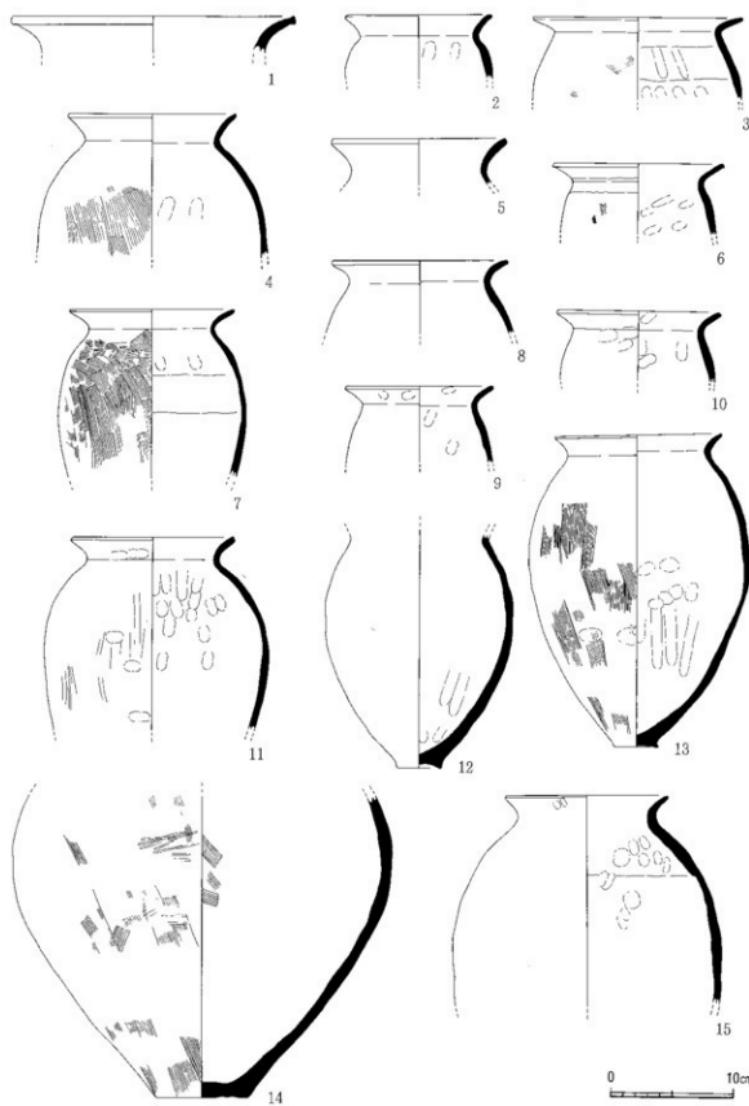


Fig. 7 ST 1出土遺物実測図

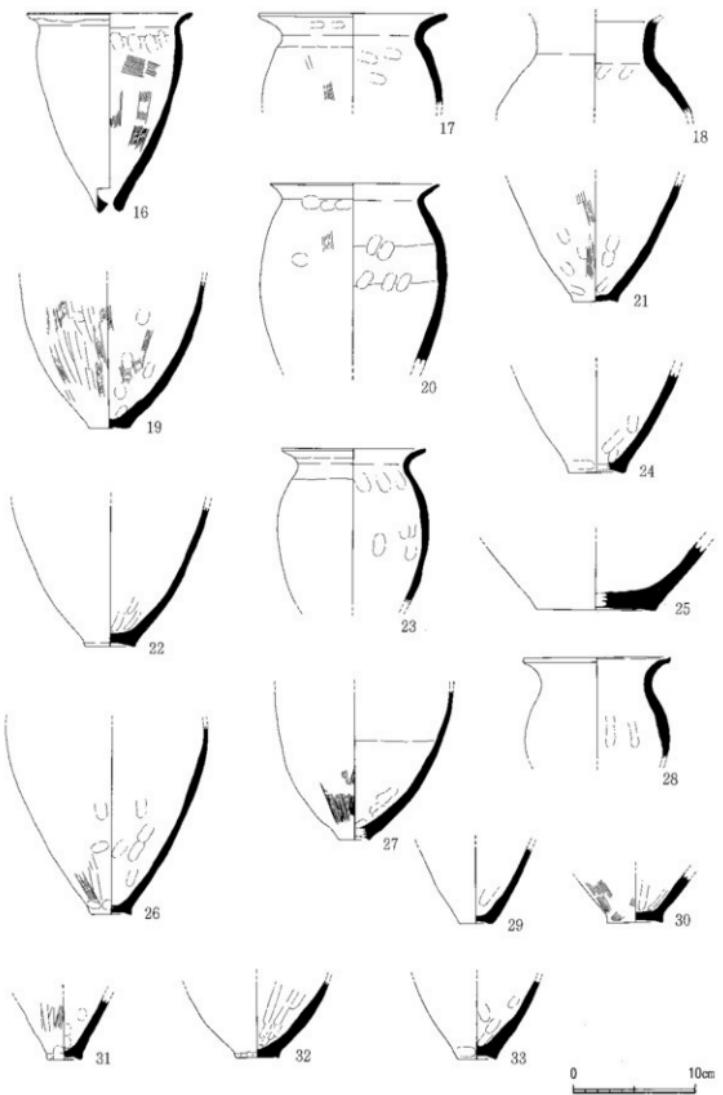


Fig. 8 ST 1 出土遺物実測図

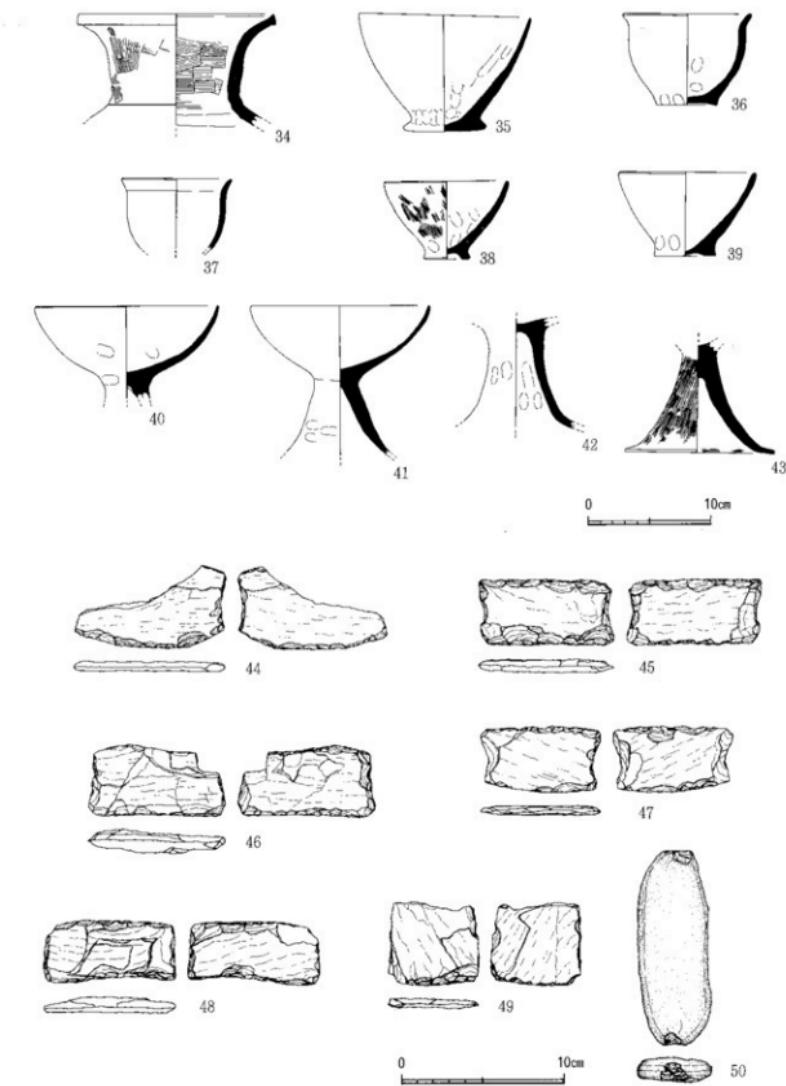


Fig. 9 ST 1 出土遺物実測図

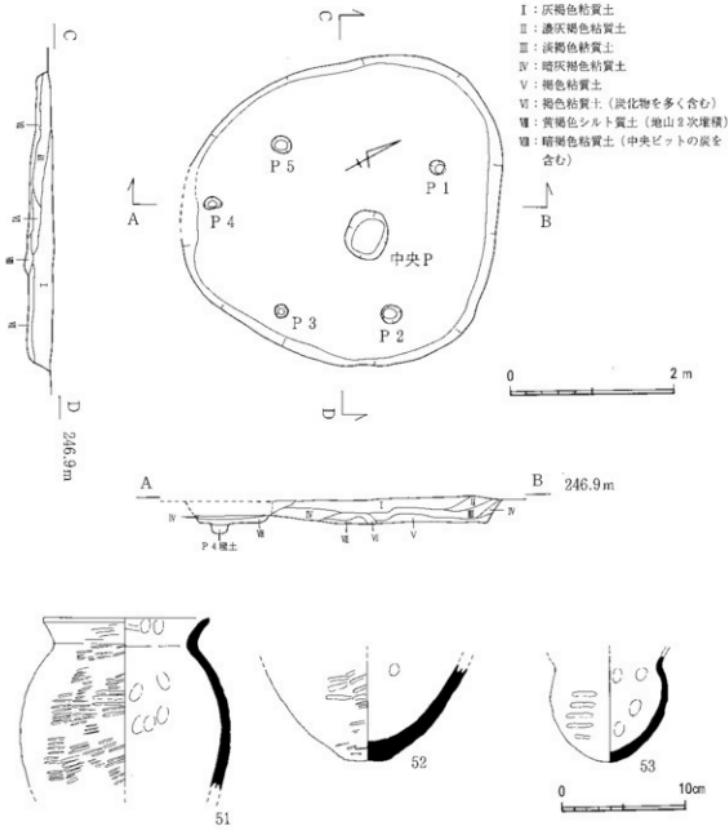


Fig.10 ST 2 平面・セクション図及び出土遺物実測図

1が2 mである。

出土遺物は、叩き目の残る甕、鉢などがあるが、少量である。図示できるのは、51～53である。51・52は、甕である。52の底部は、わずかに平底をとどめている。53は鉢である。いずれも外面は叩き成形がなされている。ST 2は、弥生時代後葉に属する。

Tab. 2 ST 2 ピット計測表

ピット NO	平面規模(cm)	深さ(cm)	平面形態
P 1	23×20	18	不整椭円形
P 2	径18	14	不整椭円形
P 3	24×21	19	不整椭円形
P 4	径16	12	円形
P 5	22×15	12	不整椭円形

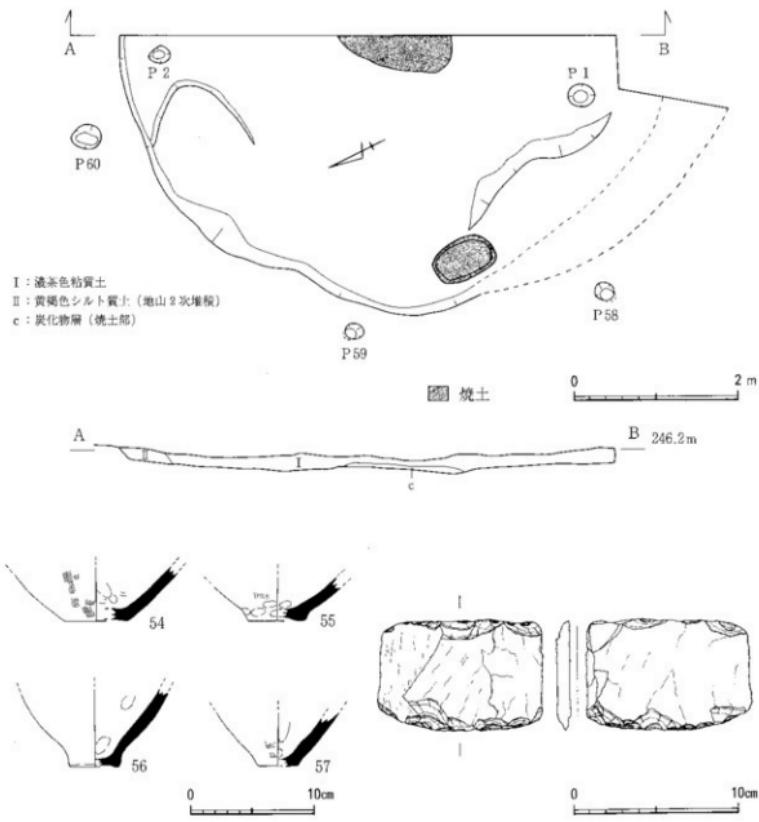


Fig.11 ST 3 平面・セクション図及び出土遺物実測図

### ST 3 (Fig.11)

調査区の西で検出した竪穴居である。隅丸形あるいは不整円形の平面形を有するが、半分ほどが調査区外となっており、また、西から南にかけての壁部が削平を受けているため、全体を確認することはできない。長軸はおよそ6.6m前後を想定することができよう。検出面から床面までの深さは、17~30cmを測る。埋土は、I層：濃茶色粘質土が主要層準をなす。床面はほぼ平坦であるが、南西部と北部に地山削り出しによる段が認められる。高床部と低床部の比高差は、南西部で9cm、北部で6cmを測る。しかしながら、ベッド状遺構かどうかは明らかでない。住居内のピットとしては、P 1 (32×25・深さ20) と P 2 (27×20・深さ11) (単位はcm) があるが、いずれも壁に

近い位置にあるため、上屋構造に伴うものとは想定し得ない。竪穴の周囲には、ピット P 58 (24×20・深さ32), P 59 (24×18・深さ13), P 60 (36×30・深さ9) (単位はcm) があり、これらは住居の上屋構造を構成する垂木状の柱の柱穴の可能性がある。中央ピットとみられるものは確認できなかったが、住居のはば中央と西の壁際に焼土が認められる。

本住居址も遺物が乏しく、図示できるものは54～58である。土器はすべて壺で、55と56は、上げ底の底部を有する。一方、叩き目を残すものは認められなかった。58は結晶片岩製の石包丁である。ST 3 は、弥生時代後期中葉に属する。

## (2) 土坑

土坑については、出土遺物からみて、弥生時代に属するものと中世に属するものがあるが、遺物の出土がなく、時期、性格が不明なものも多い。出土遺物が認められた主要なものの文書で説明し、他のものについては、中世の土坑の項目のあとへ、一覧表 (Tab. 3) において法量形態を示した。

### SK 2 (Fig.12)

調査区の北東部にあり、平面形は方形を呈し、長軸140cm、短軸136cm、深さ20cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、床面はほぼ平坦である。埋土は茶褐色粘質土單純一層で、出土遺物は、埋土中より、土錐(59)と壺(60)があり、60の外面は激しく煤けている。後期後葉に属する。

### SK 4 (Fig.12)

ST 1 の4mほど南に位置し、平面形は長軸128cm、短軸80cmの梢円形を呈している。深さは90cmほどを測り、南側は上部でテラス状になっている。床面は中央部が凹む。埋土は、地表から37cmほどまでが灰茶色粘質土で、以下、濃茶色粘質土となる。遺物は、床面から10～20cm上方で、弥生土器が多く出土しているが、図示可能なものは4点である。

61・62・63は壺である。いずれも外面ハケ、内面ナデ調整が施されている。62の底部は上げ底になっている。64は高壺の脚部である。後期中葉に属する。有機物は確認できなかったが、その形態から貯蔵穴とみられ、同時期の竪穴住居 ST 1 との位置関係からみて、ST 1 に付属する、貯蔵を目的とした施設である可能性が高い。

### SK 5 (Fig.13)

調査区の北東隅にある不整形の土坑で、長軸268cm、短軸90cm、深さ20～60cmを測る。埋土は濃褐色粘質土單純一層である。遺物は、埋土中より、弥生後期後葉の壺(65)と壺(66)が出土している。

### SK 7 (Fig.13)

調査区の南西壁、中ほどにあり、平面形は概ね梢円形を呈する。長軸200cm、短軸80cm、深さ6～10cmを測る。壁は、西側は急傾斜、東側は緩やかに立ち上がっている。埋土は暗褐色粘質土單純一層である。遺物は、埋土中及び底面より、後期後葉の壺(66・67・68・70・71・72・74・75)、壺(69・73・76)、高壺(77)などが多量に出土している。77は、角閃石を含む胎土に讃岐の土器にみられる特徴があり、讃岐からの搬入品である可能性がある。

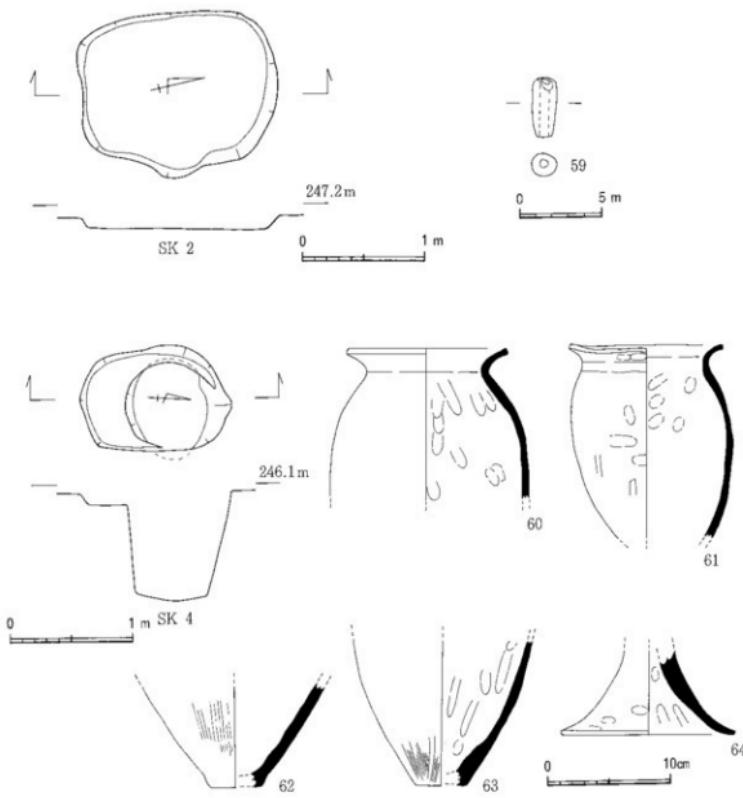


Fig.12 SK 2・4平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

#### SK 17 (Fig.14)

調査区の南のなかほどに位置し、SK 13の床面で検出した。長軸128cm、短軸84cm、深さ20~32cmを測り、平面形は不整橢円形を呈する。埋土は灰褐色粘質土単純一層である。遺物は埋土中より出土しており、壺(78)口縁部はラッパ状に強く外反するタイプで、後期後葉以降~古墳時代初頭に盛行するものである。鉢(79)は外部が被熱赤変し、激しく焼けている。

#### SK 24 (Fig.14)

調査区の最北部に位置し、不整円形の平面形を呈している。長軸132cm、短軸108cm、深さ80cmを測る。南側の1部はオーバーハングしており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は緩やかに凹になっている。埋土はその中ほどで上層と下層に分かれ、上層は黒褐色粘質土、下層は褐色粘質

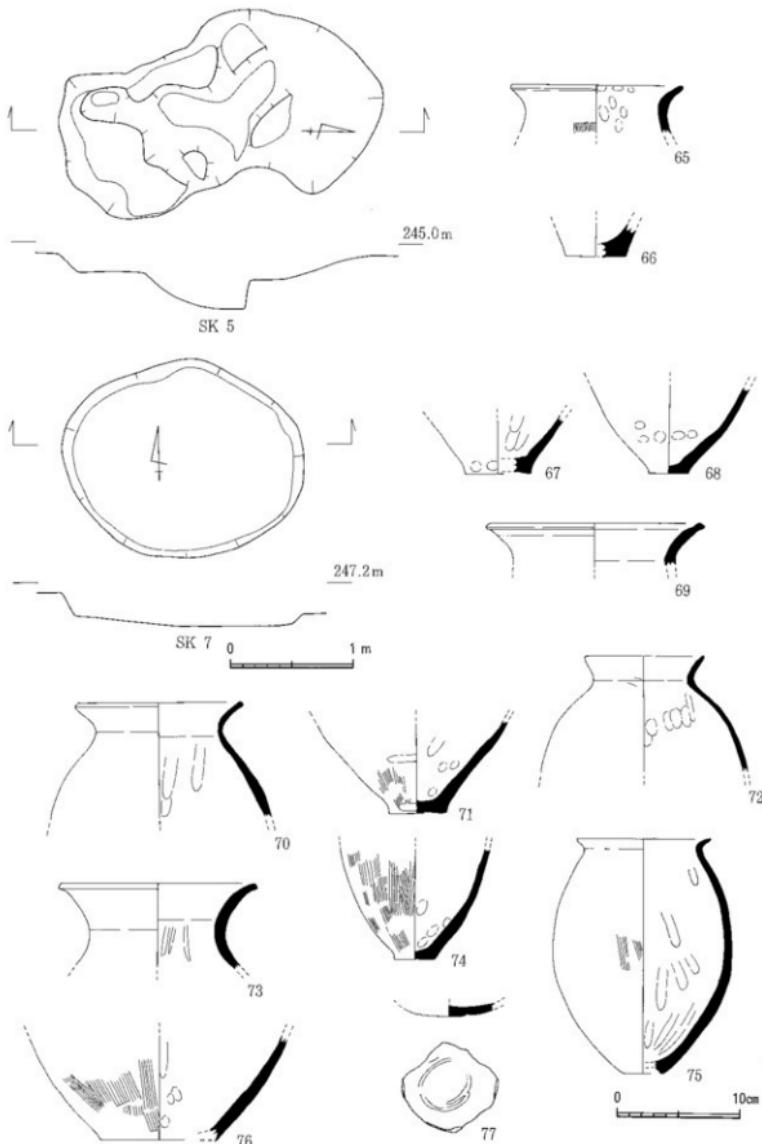


Fig.13 SK 5・7 平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

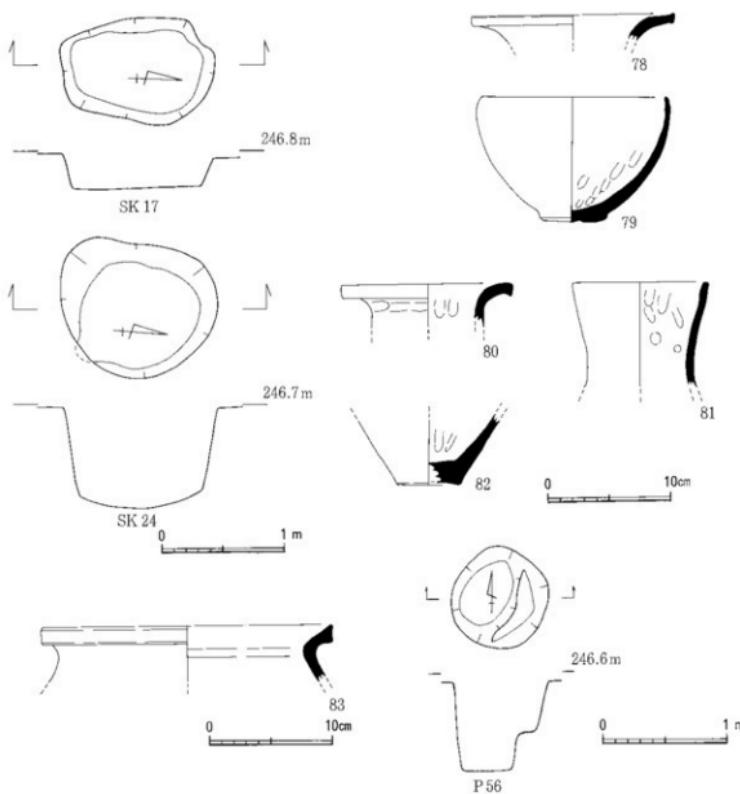


Fig.14 SK 17・24, P 56平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

土となる。埋土中より、弥生後期の内外ナデ調整を基調とする壺（80, 81）や、壺（82）が出土している。

### （3）ピット

ピットは多数検出したが、遺物が出土せず、時期不明のものが多い。また建物を構成するものは確認できなかった。ここでは遺物の出土したピットのみ説明する。

#### P 56 (Fig.14)

ST 1とST 2のはば中間にある。平面形は不整円形を呈し、径ははば80cmを測る。内部は東側でテラス状となった後、最深部に至り、72cmを測る。埋土中より壺（83）が出土している。後期に属する。

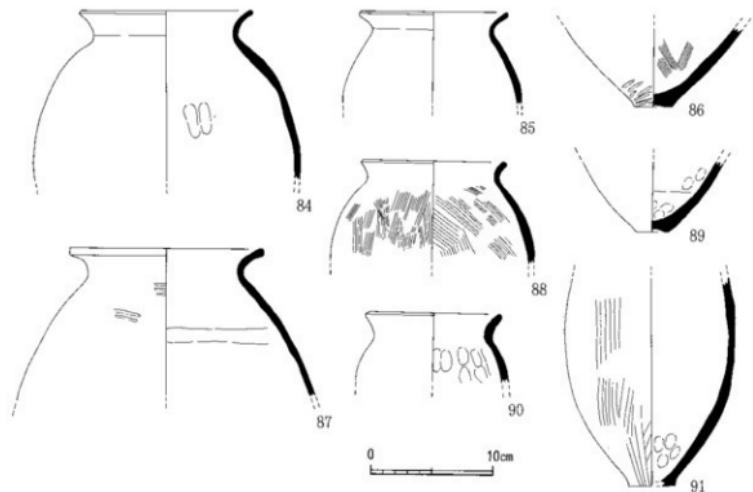


Fig.15 IX層上面からの集中出土遺物実測図

#### (4) 包含層IX層上面からの集中出土遺物 (Fig.15)

調査区中、IX層：茶灰色粘質土、座標N-5を中心とする半径2メートルほどの範囲で、IX層の上面から30点ほどの遺物が出土している。IX層は、ST 3の検出面の直上の土層であり、座標N-5は、調査区の南西に位置し、地形は東に緩傾斜している。今回の調査においては、遺構以外では遺物の出土は散発的であり、包含層からの遺物の出土には一定のまとまりはみられない。このため、IX層上面の座標N-5を中心とする範囲で遺物が出土した時点で、遺構の存在する可能性も想定されたが、結果としては遺構の存在は認められなかった。偶発的に一定のまとまりを持って土中に埋もれたものとみられる。同様の例は、同じ本山町の堀ノ尻遺跡や永田遺跡でみられる。しかし、永田遺跡のような煮沸を伴う祭祀の可能性については不明である。

ここでは、出土遺物中、84～91までの8点を図示する。すべて壺であり、底部の確認できるもののうち、86と89はわずかに上げ底となっている。また、86は底部に、87は胴上部に叩き成形が認められる。上げ底の底部は、瀬戸内色の強い技法であるが、高知では弥生時代後期中葉にのみみられる。これに対し、叩きは、弥生時代後期後葉のボビュラーな成形技法である。86には上げ底の底部と叩きが混在しているが、これは、当該地域に叩き技法が伝わった当時に制作されたものとしてみることができる。

### 3. 中世の遺構と遺物

土坑・ピットとも多数検出したが、弥生の項目でも触れたように出土遺物がなく時期が特定できないものが多い。またピットについては、建物を構成するものは中世においても確認できなかつた。ここでは遺物の出土したものについてのみ、文章で説明する。なお、その他の土坑については一覧表 (Tab. 3, Fig.17・18) で示す。

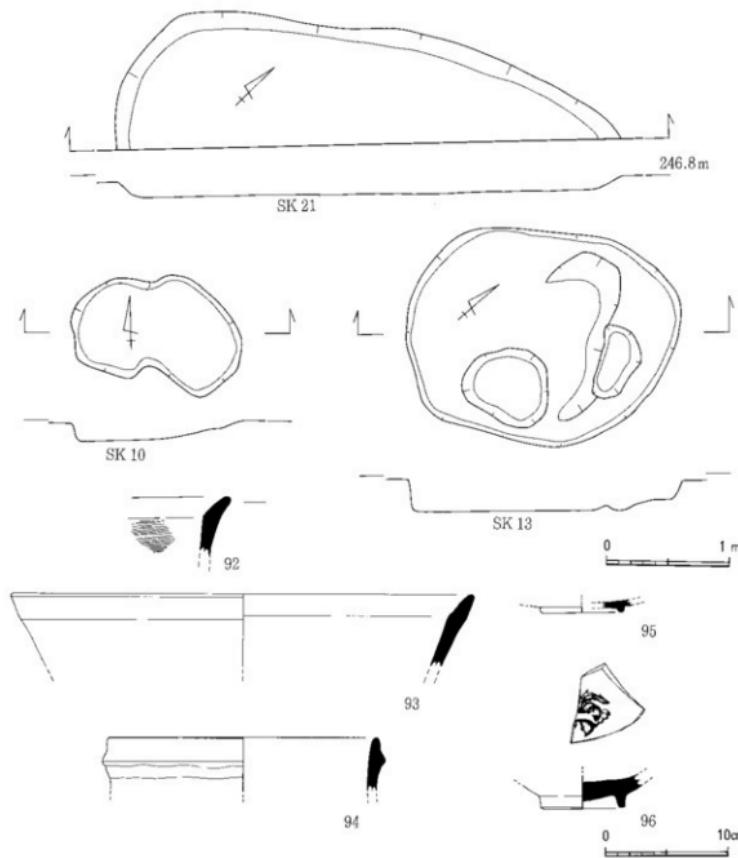


Fig.16 SK 10・13・21平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

### (1) 土坑

#### SK 10 (Fig.16)

調査区の西ほぼ中ほどに位置し平面形は不整形を呈する。長軸140cm, 短軸72cm, 深さ6~22cmを測る。壁は西側から急傾斜で立ち上がり, 床面は西側に向けて低く傾斜している。埋土中より土師壺(95)が出土している。この土坑は中世に属する。

#### SK 13 (Fig.16)

調査区の南西に位置し平面形は楕円に近い。長軸226cm, 短軸176cm, 深さ10~25cmを測る。北東部がテラス状となるほか, 土坑内土坑が2基認められる。埋土は灰褐色粘質土である。中世の鍋(92)が出土している。この土坑は中世に属する。

#### SK 21 (Fig.16)

調査区の中ほどに位置し, 長楕円形の平面形を呈していると考えられるが半分以上が調査区外にあるため, 全体形は明確ではない。壁は緩やかに立ち上がり, 床面はほぼ平坦である。土師鍋(93)15世紀の土師鍋(94), 青磁碗(96)が出土している。中世に属する。

Tab. 3 遺物皆無の土坑計測表

	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
SK 1	不整長方形	144	76	5
SK 3	隅丸長方形	272	104	26
SK 6	隅丸台形	152	136	16~18
SK 8	不整円形	188	176	30
SK 9	不整楕円形	132	124	34
SK 11	楕円形	136	88	10~14
SK 12	隅丸長方形	136	88	7~16
SK 14	長方形	136	88	20~24
SK 15	隅丸長方形	184	124	48
SK 16	隅丸長方形	196	88	28~40
SK 18	隅丸長方形	140	80	60~64
SK 19	隅丸長方形	176	100	52~60
SK 20	隅丸長方形	200	76	30
SK 22	隅丸長方形	156	104	20
SK 23	長方形	208	80	28

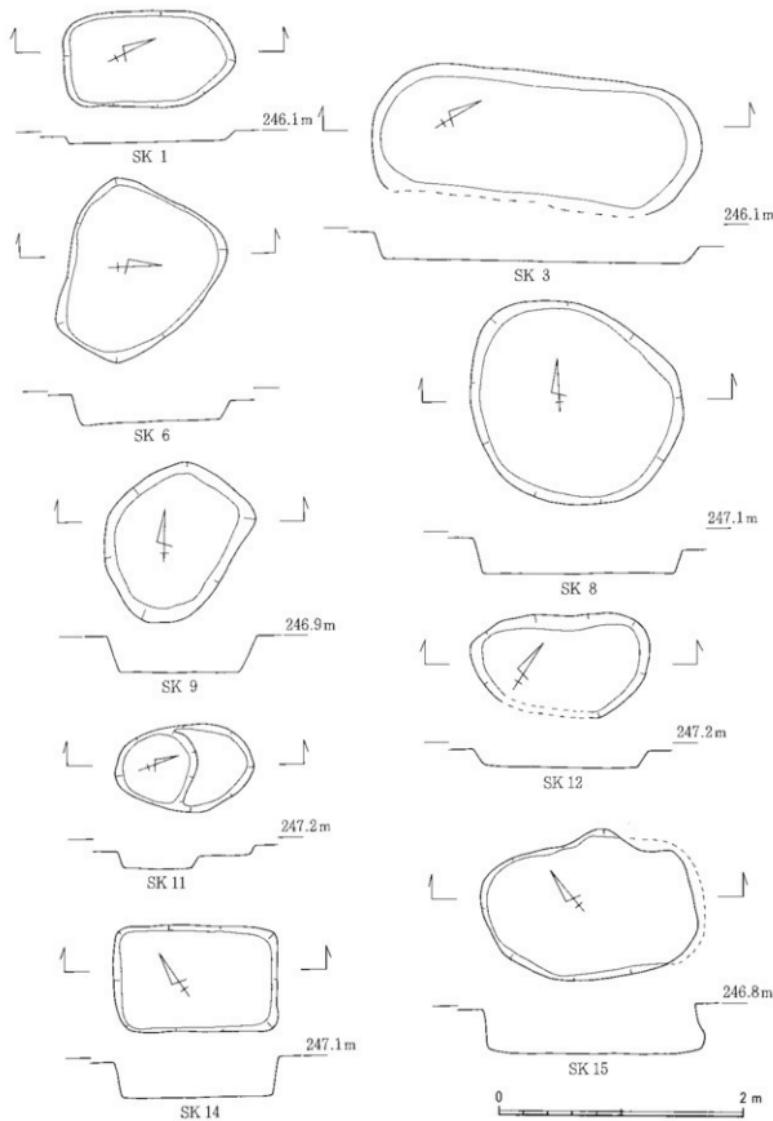


Fig.17 SK 1・3・6・8・9・11・12・14・15平面及びエレベーション図

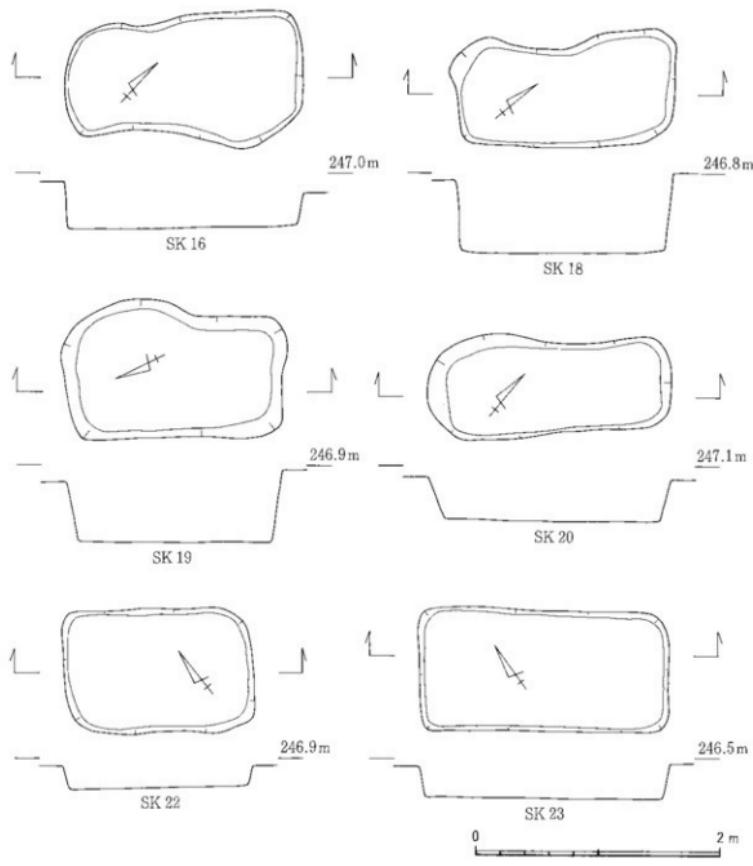


Fig.18 SK 16・18・19・20・22・23平面及びエレベーション図

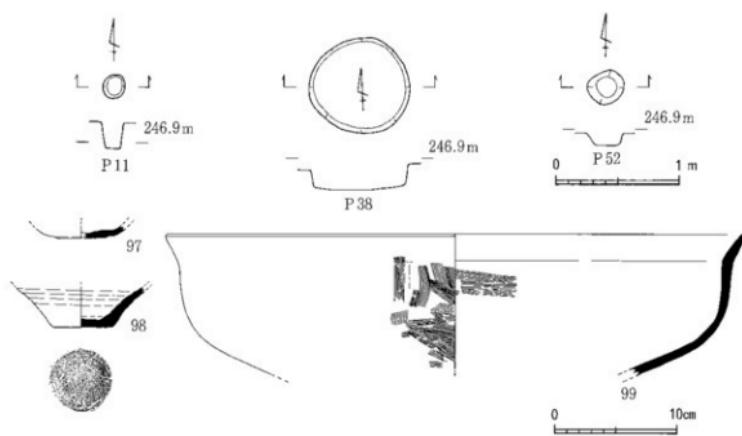


Fig.19 P 11・38・52平面・エレベーション図及び出土遺物実測図

## (2) ピット

### P 11 (Fig.19)

調査区の西にあり、平面形はほぼ円形を呈する。径が20cm、深さ20cmを測る。埋土は褐色粘質土である。埋土中より土師器壺（97）が出土している。97は精選された胎土で底部は回転糸切りとなっている。中世に属する。

### P 38 (Fig.19)

調査区の西やや中ほどにあり、平面形は円形を呈する。径が80cm、深さ20cmを測る。埋土は褐色粘質土である。底面壁際より室町後期と見られる土鍋（99）が出土している。99の内面底部と外面は煤けている。中世に属する。

### P 52 (Fig.19)

調査区の西やや南にあり、平面形は不整円形を呈する。径が30cm×26cm、深さ10cmを測る。埋土は褐色粘質土である。埋土中より土師器壺（98）が出土している。98は内外面のロクロ目が顯著で底部は回転糸切りとなっている。中世に属する。

#### 4. 包含層出土の遺物

堆積土のうちⅢ層からⅨ層までが遺物包含層を形成しているが、中世と弥生時代の遺物が同一の土層に含まれるなど、純粹な包含層の層位は示していない。ここでは包含層出土の遺物のうち、図示できるものについて、時代別に説明する。

##### (1) 縄文時代

縄文時代の遺物としては早期の所産と考えられるトロトロ石器(136)が1点出土している。石材はチャートではなく完形品である。全長3.7cm、厚さ0.4cm、重さ3.7g、幅は基部で2.4cmを測る。一面は細押圧剥離が施され他の一面には、中央部に剥離面が残る。基部の双部は非対称的に開く。

##### (2) 弥生時代

###### (1) 土器

###### ① 壺

前期のものとして、154が出土している。西見当I式に属するもので、嶺北地域における最古の速質円式土器として位置付けられる。この遺物については、第V章まとめで、詳しく述べる。このほかに、後期のものとして、100~105、107、115、117、122、124、134、137、143、145、154~158が出土している。

105、115は底部が上げ底を成す。86、87、106、134は叩き痕跡を残す。

###### ② 壺

106、108、109、112、114、125が出土している。109・125は上げ底を持つ。106は叩き成形である。

###### ③ 鉢

110、111、113、120、138、142、161、164が出土している。110、111、161、164は台形状の底部を持ち、指頭圧痕が顕著に見られる。113は上げ底を成す。142は脚付き鉢と見られる。

###### ④ 高坏

116、139が出土している。ともに脚部である。

###### ⑤ 土鍤

1点のみ130が出土している。

###### (2) 石器・鉄器

###### ① 石器

打製石包丁(170)が出土している。石材は結晶片岩である。

###### ② 鉄器

鉄鎌(128、129)が出土している。

###### (3) 中世

###### ① 土師器

鍋(118、121、135)、壺(141)が出土している。鍋は中世の典型的な大型鍋で外面は激しく焼けている。嶺北地域で比較的多く出土するタイプである。

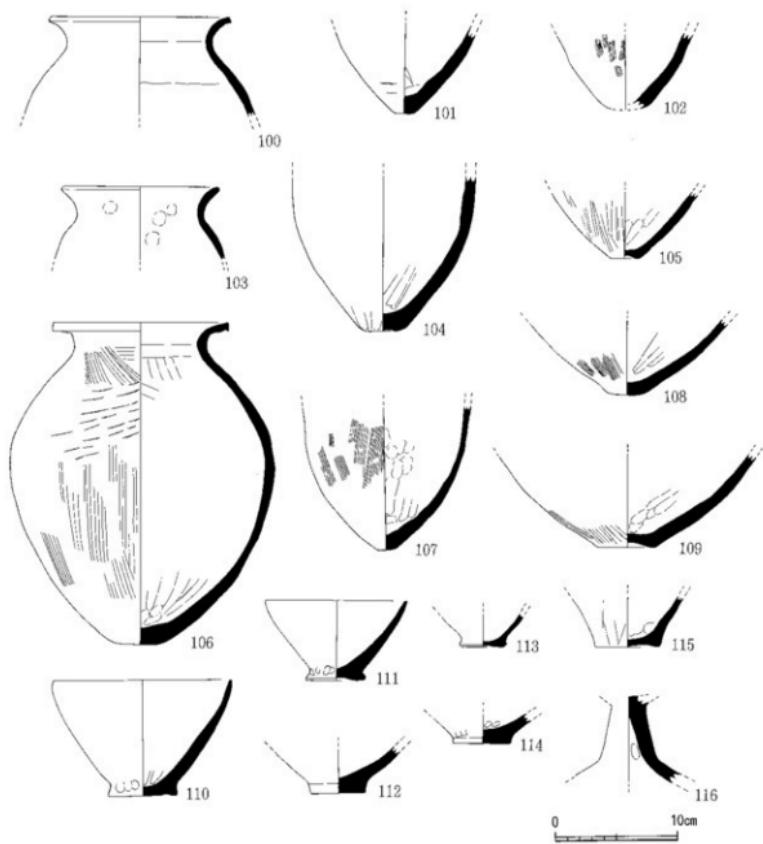


Fig.20 包含層出土遺物実測図

② 白磁

皿は144, 151, 160が出土している。144は口ハゲタイプの皿、151は内湾タイプ、160は端反りの小皿である。

③ 青磁

碗（123, 126, 127, 132, 133）と皿（153, 167）がある。碗はすべて龍泉窯系のものである。126は内底に草花文、127は内面に飛雲文、133は鎧蓮弁文、166, 168, 169は細蓮弁文を施している。

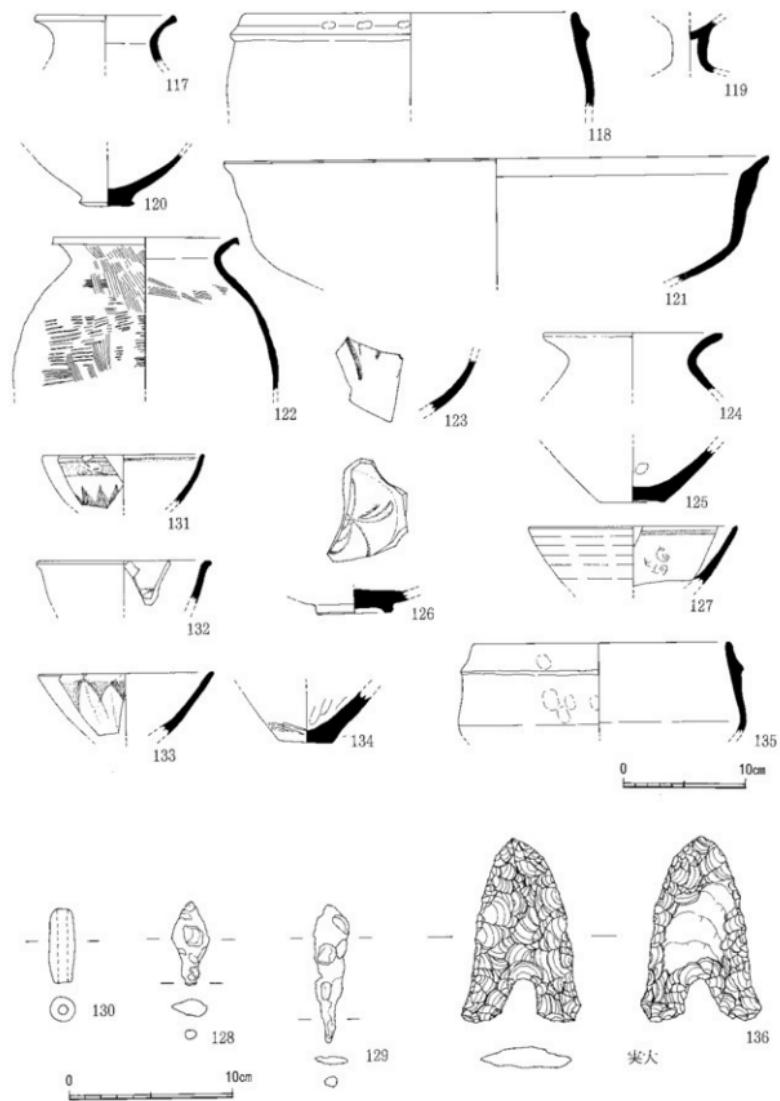
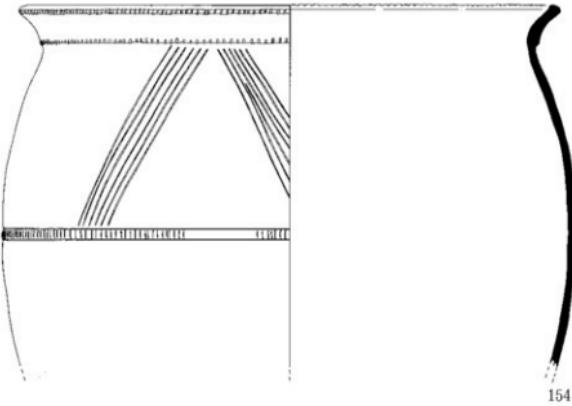
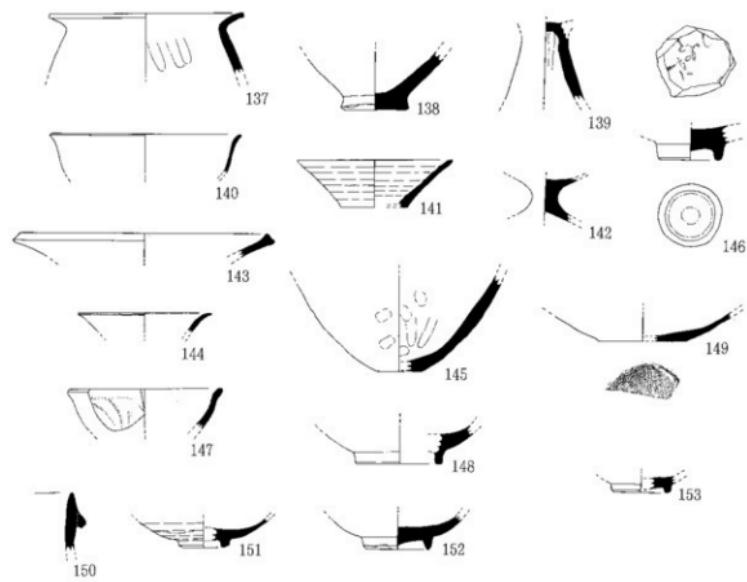


Fig.21 包含層出土遺物実測図



0 10cm

Fig.22 包含層出土遺物実測図

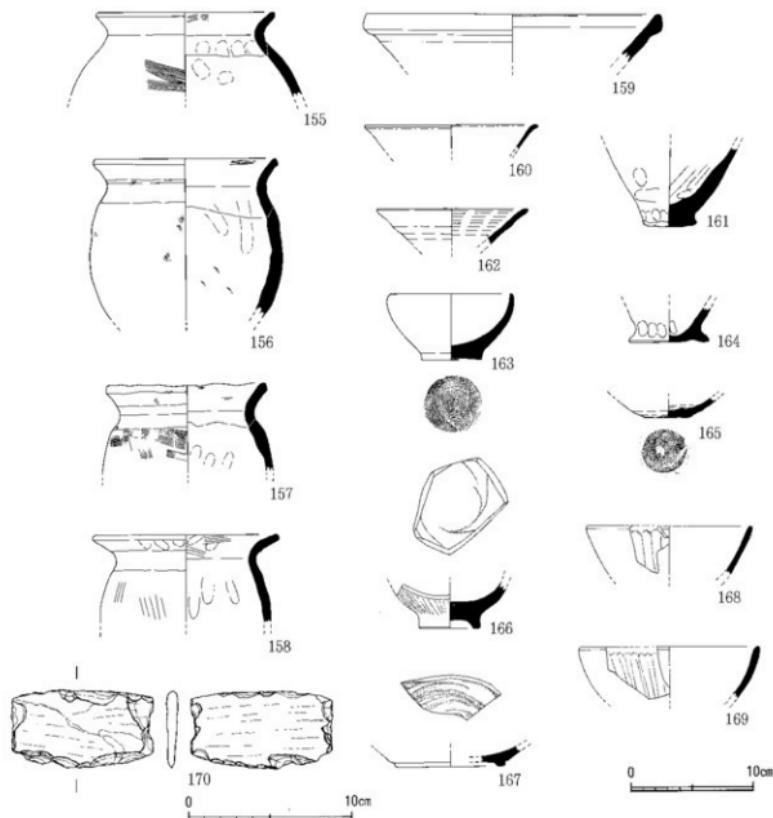


Fig.23 包含層出土遺物実測図

#### ④ 染付け

いわゆる陶胎染付の碗である（131）。体部外面に芭蕉文、口縁外面に波濤文、口縁内面は堺線を描く。

この他、東播系のコネ鉢（159）と肥前系の鉢（167）が出土している。

## 第V章 まとめ

今次調査では、遺構の時期・性格について不明なものも多いが、出土遺物からみて、銀杏ノ木遺跡は、縄文時代早期、弥生時代前期及び後期、中世にわたる遺跡といえる。特に、弥生時代後期中葉から後葉にかけてと中世15世紀に盛行期を持つ。ここでは、これらの遺構・遺物のうち、当遺跡を特徴づける縄文時代と弥生時代についてまとめる。

### 1. 縄文時代早期の石器について

今次出土遺物のうち、もっとも時代を遡るものとして、縄文時代早期の所産とみられるトロトロ石器(136)が1点、包含層より出土している。土器の共伴はみられなかった。この石器は、形態は石鏃と同様であるが、石質、先端、脚部は本石器特有のものを持ち、その機能は石鏃の範疇では捉えられないものである。<sup>(1)</sup>これまで四国西南部から11例出土している(Fig.23)のみであり、本県中央部からの出土としては、初例となった。当遺跡周辺で縄文時代早期のものとしては、西方に所在する長徳寺遺跡から葛島式土器、また大型楕円押型文の高山寺式土器が出土しており、トロトロ石器の出土は、その分布圏に新たな一石を投じるとともに、該期の嶺北地域を検討する上で、重要な資料となつた。

#### 註

- (1) 木村剛朗『四国西南沿海部の先史文化』  
幡多垣文研 1995年  
(2) 岡本健児他『長徳寺址発掘調査報告書』  
高知県長岡郡本山村教育委員会 1977年

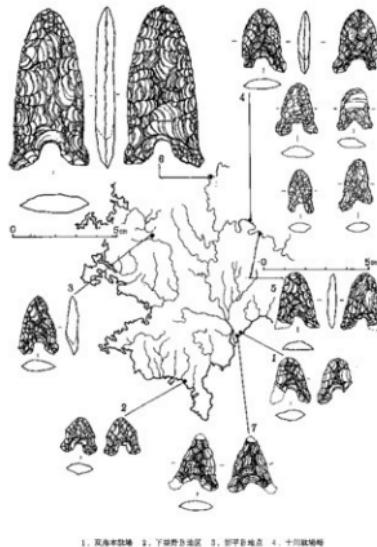


Fig.24 西南四国における縄文時代早～前期のトロトロ石器と出土遺跡分布図

木村剛朗『四国西南沿海部の先史文化』890ページ第621図を縮少して転載

## 2. 弥生文化の「伝播」ルートとしての嶺北

今次調査において、僅か1点ではあるが遠賀川式土器の壺（Fig.21-154）が出土した。高知平野の編年に併行関係を求めるに前期I-2期、岡本健児氏の編年では西見当I式に該当させることができる。この土器の特徴は、壺の有段口縁に類似した殷部と縄文晚期土器の伝統を残す胸部の割り出し状の突帯にある。この種の壺は、前期I-2期の中でも僅少であるが、類似例を西見当遺跡8号貯蔵穴出土の壺に求めることができる。銀杏ノ木遺跡の上流にある松ノ木遺跡からも最近数点の遠賀川式土器が出土して注目されているが、松ノ木遺跡のものは前期I-3期、岡本編年による西見当II式に該当するものである。したがって、今次出土のものは嶺北地域における最古の遠賀川式土器として位置付けることができる。前期I-2期に遡る遠賀川式土器の出土例は、高知平野の田村遺跡、仁ノ遺跡、県西部の中村平野にある入田遺跡以外では認められない。南四国において遠賀川式土器が、平野部から中小河川の中上游域に分布するようになるのは、これまでの事例によると弥生前期の遺跡が増加しはじめる前期後葉、すなわち前期I-4期の段階を待たなければならぬ。

したがって、本例は松ノ木遺跡の諸例とともに、南四国における遠賀川式土器分布の諸段階一般とは、異なった状況を示すものである。このような現象の背景については、すでに当地域が瀬戸内と高知平野とを繋ぐ物流ルートの中継地としての重要な役割を果たしていたことについて述べたが、今回の事例はそのことをあらためて示したものである。隣接する永田遺跡や松ノ木遺跡からは縄文晚期末葉の刻目突帯文土器が出土し、八反坪遺跡からは晚期中葉の土器が出土している。これら一連の晚期土器は、中部瀬戸内の谷尻式や沢田式に類似するものであり、四国山中にあって当地域は中部瀬戸内の土器分布圏に属していたことが窺える。一方、高知平野における晚期土器の出土は未だ僅少ながらも、やはり中部瀬戸内的特徴を備えている。

すでに周知のように、高知平野の中央部にある田村遺跡においては、近年、弥生文化成立期の極めて良好な資料の検出が相次いでいる。いわゆる松菊里型住居や掘立柱建物で構成される初期の集落址やそれに続いて營まれる環濠を有する集落址、それらに伴う一括性の高い土器や石器などは、弥生文化の成立を明らかにする上で刮目すべき資料として俄に注目を集めるようになった。かつて、高知平野における弥生文化の成立は、県西部からの伝播の結果とされてきたが、最近の知見には対応しないものであり、中部瀬戸内で生成されたものと理解せざるを得ない状況にある。筆者はすでに弥生文化成立期の高知平野は環中部瀬戸内の土器文化圏に属することを述べたが<sup>(4)</sup>、これは銀杏ノ木遺跡や松ノ木遺跡が存在する嶺北地域を介してはじめて可能になるのである。弥生文化成立期後に果たした嶺北地域の役割については、今後さらに追究していくなければならない。

（出原恵三）

### 註

（1）出原恵三「土佐」「弥生土器の様式と編年」四国編 木耳社 近刊予定

（2）岡本健児「西見当I式土器とその縄文の要素」『考古学ジャーナル』NO.170 1970年

（3）出原恵三「弥生前期土器」「松ノ木遺跡IV」高知県長岡郡本山村教育委員会 1996年

(4) 国本健児「八反坪遺跡出土の土器」『E屋敷・八反坪遺跡と出土遺物』高知県土佐郡土佐町教育委員会  
1981年

(5) 高橋 譲「弥生文化のひろがり」『弥生文化の研究 9』有山閣 1986年

(6) 出原恵三「南四国における弥生文化の成立」『土佐史談』200号 土佐史談会 1996年

### 3. 弥生後期の銀杏ノ木遺跡とその周辺

当遺跡周辺は、高知県の中央北部にあって、縄文時代から古墳時代初頭にかけての遺跡が数珠繋ぎに密集した地域である。これは吉野川の河岸段丘上に平坦地が形成された良好な立地条件に起因するところが大きいと考えられ、当該地域の遺跡の大半が、吉野川とその支流沿いに集中している。殊に弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけては、遺跡数がその前後の時代と比して飛躍的に増加する時期である。該期の代表的な生活構造である竪穴住居は、18棟が検出されているが、内訳は、当遺跡の上流側に位置する松ノ木遺跡から14棟、さらに西の吉野川支流である地蔵寺川右岸に位置する田畠遺跡から2棟<sup>(2)</sup>、そして、下流側の永田遺跡で2棟となる。<sup>(3)</sup>このほか、嶺北高校校庭遺跡、堀ノ尻遺跡<sup>(4)</sup>、八反坪遺跡からは、竪穴住居の検出はないものの、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器が出土している。

こうした状況に対し、銀杏ノ木遺跡では、今回、竪穴住居を3棟検出した。このうち2棟は、弥生時代後期中葉（後期II-3期）に属するものである。これまでに検出された竪穴住居はいずれも後期後葉（後期III-1期）をさかのばるのではなく、当該地域における弥生期の竪穴住居検出例としては、もっとも古い段階に位置付けられる。銀杏ノ木遺跡では、前回、1981年の調査の際にも、後期II-3期に比定される上げ底状の底部を持つ甕が出土しているが、今次調査での竪穴住居の検出により、該期の集落址の存在が明確となった。その他の遺跡でこの時期のものとしては、唯一、永田遺跡の土坑SK32をあげることができる。ともに土器編年後期II-3期に属する土器、殊に小型で上げ底の底部を有する土器が大量に出土している。土器底部を上げ底に成形する手法は、当該期の環瀬戸内に広く認められる特徴であり、松山平野では松山大学構内遺跡SB-7や祝谷アリ遺跡SK15<sup>(5)</sup>、讃岐では下川津遺跡弥生土器溜り5などがあげられる。これに対し高知平野の資料としては深瀬遺跡のST3出土の土器の中に認められるものの、永田遺跡SK32や今次資料ほどに小型の底部に顕著な上げ底を持つ土器がまとめて出土する例はみられず、南四国中央部の中でも、山間地と平野部では、様相を異にしている。

銀杏ノ木遺跡は、弥生時代後期後葉から古墳時代初頭にかけての吉野川上流域における一連の遺跡増加の展開の中で捉えられる遺跡ではあるが、その中にあって、他の遺跡に先行して、後期中葉段階で出現するところに特徴がみられる。また、土器底部に現われる特徴から、後期中葉の段階において、当遺跡周辺の地域が高知平野とは違った社会環境にあって、独特の文化を形成していたことが想定されるのである。

#### 註

(1) 出原恵三『松ノ木遺跡II』高知県長岡郡本山町教育委員会 1991年

- 前田光雄『松ノ木遺跡Ⅲ』高知県長岡郡本山村教育委員会 1993年
- 出原恵三・前田光雄『松ノ木遺跡Ⅳ』高知県長岡郡本山村教育委員会 1996年
- (2) 筒井敬二『田畠遺跡』高知県土佐郡土佐町教育委員会 1996年
- 筒井敬二『田畠遺跡Ⅱ』高知県土佐郡土佐町教育委員会 1997年
- (3) 出原恵三『永田遺跡』高知県長岡郡本山村教育委員会 1995年
- (4) 岡本健児他『嶺北高校校庭出土の遺物群』『長徳寺址発掘調査報告書』高知県長岡郡本山村教育委員会 1977年
- (5) 出原恵三『堀ノ尻遺跡』高知県長岡郡本山村教育委員会 1993年
- (6) 沢本健児他「玉屋敷・八反坪遺跡と出土物」『土佐町資料』高知県土佐郡土佐町教育委員会 1981年
- (7) 岡本健児『銀杏ノ木遺跡の発掘』高知県長岡郡本山村教育委員会 1984年
- (8) 梅木謙一他『松山大学構内遺跡－第2次調査－』松山大学 松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1991年
- (9) 梅木謙一他『祝谷アシリ遺跡』(財)松山市生涯学習振興財団 埋蔵文化財センター 1992年
- (10) 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡－第2分冊－』香川県教育委員会(財)香川県埋蔵文化財調査センター 本州四国連絡橋公团 1990年

## おわりに

この銀杏ノ木遺跡発掘調査において、土佐町教育委員会生涯学習センターの筒井敬二氏に大変お世話になった。自分の仕事を犠牲にし、1年もの貴重な月日をこの調査に費やしてくれた。心より感謝申し上げたい。

この調査は雨期の時期も重なって予想以上に難渋した。大雨の後、全遺構内に水がたまり呆然と立ちつくしたこと。調査区に流れ込んだ泥水を何度も何度も、泥まみれになりながらかき出す作業員さんの姿がそこにはあった。猛暑・疲労・苛立ちの中、どんな時も輝いていた作業員さん達の笑顔を私達はいつまでも忘れない。



作業員全員の写真を掲載できなかったことを御了承下さい。

遺物観察表

発掘番号	出土地点	器種	口縁 基部 厚径 (cm)	特 徴	備 考
1	ST 1	甕	23.2 (3.0) — —	チャート、石英の細粒砂を含む。にぶい黄褐色。口唇面取り。内外ヨコナダ調整。	
2	+	+	12.1 (5.3) — —	結晶片岩の粗粒を多く含む。にぶい橙色。内外器表の荒れが激しい。	
3	+	+	17.2 (6.8) — —	長石、石英、チャートの細粒砂を含む。肩部外側ハケ。内面ナダ。内面に複合痕跡が見られる。	外側激しく焼ける。
4	+	+	17.5 (11.7) — —	チャート、長石、結晶片岩を含む。橙色。口縁内外ヨコナダで肩部外側ハケ。内面ナダ。	外側激しく焼ける。
5	+	+	14.8 (4.8) — —	石英、結晶片岩の粗粒砂を含む。内面ににぶい黄褐色で外面は橙色。口唇面取る。内外ヨコナダ調整。	
6	+	+	13.8 (5.85) — —	チャートの粗粒、長石の細粒を含む。内面ににぶい黄褐色、外面灰黃褐色。口唇面取り。口縁内外はヨコナダ調整。肩外面はタテハケ。	
7	+	+	13.6 (13.8) —	チャート小磚、粗粒砂を含む。にぶい黄褐色。口縁内外ヨコナダ、胸部外側タテハケ、内面ナダ。	外側激しく焼ける。
8	+	+	14.4 (6.0) — —	長石、チャートの細粒砂を含む。内面ににぶい橙色。内外ナダ。	外側焼ける。
9	+	+	12.0 (6.5) —	チャート他の粗粒砂を含む。内面橙色。外面ににぶい黄褐色。内外器表の荒れが激しい。	外側激しく焼ける。
10	+	+	13.2 (5.7) — —	チャート、長石の細粒砂を含む。にぶい橙色。内外器表の荒れが激しい。	外側焼ける。
11	+	+	13.1 (16.0) — —	結晶片岩、チャート粒を含む。内面ににぶい黄褐色、外面ににぶい黄褐色。口唇面取り。肩内面指ナダ。外側タテハケナダ。	外側激しく焼ける。
12	+	+	— (19.6) — 3.7	内面浅黄色で指ナダ、外面ににぶい黄褐色でハケナダ。上げ底は脚部をつまみ出す。	外側被熱変形で焼ける。
13	+	+	13.5 25.8 — 3.5	結晶片岩、長石他の細粒砂を含む。内外浅黄褐色。口縁内面はヨコハケナダ、外側はヨコナダ。肩外側タテハケ肩内面指ナダ。底部上げ底。	外側は被熱しく焼け、被熱赤変、器表剥離。
14	+	盃	— (19.9) — 7.5	石英、長石、結晶片岩粒を含む。外面はハケナヘラミガキ、内面ハケ。	器表の荒れが激しく調整部位をつかめない。口縁崩壊。
15	+	甕	13.2 (17.3) 22.2 —	雲母、石英、長石の細粒砂を含む。内外面ににぶい黄褐色。外側ナダ調整。内面、指頭圧痕有。	外側崩下手半激しく焼ける。
16	+	+	13.5 16.5 — 1.0	長石、石英の輝度砂を多く含む。口縁外側に粘土層を貼付（または折り返す）。頭部内面、指頭圧痕、上脚部内面右下がりのハケ、下半はタチハケと指ナダ。底部が種い。外側ナダか。	底部は充填粘土が明確している。
17	+	+	15.4 (7.5) — —	長石、結晶片岩粒を多く含む。内外ににぶい黄褐色。内外ナダ。	

遺物観察表

採集番号	出土地点	器種	口径 法量 (cm)	器高 側径 底径	特徴	備考
18	ST 1	甕	— (7.7) — —	長石、チャート、石英の細粒粒砂を含む。内外面にぶい黄褐色。外側ナデ。胴部内面指頭によるナデ。		
19	+	甕	— (11.9) — 3.3	チャート、長石の細粒粒砂を含む。内外面ハケ調整。胴内面中位に大きな黒斑。	外側激しく 焼ける。上 げ底風。	
20	+	+	13.8 (14.85) —	長石、石英、結晶片岩の細粒粒砂を多く含む。にぶい黄褐色。外側わずかにハケ調整痕を認める。内面指頭圧痕、粘土接合痕跡がある。	外側激しく 焼ける。	
21	+	+	— (10.0) — 3.7	チャート、石英、結晶片岩紋を含む。外側タテハケ+ナデ。内面ナデ。上げ底風。縁部をつまみ出す。	外側焼ける。	
22	+	+	— (11.5) 4.1	石英、チャート、結晶片岩紋を含む。内面にぶい黄褐色。外側にぶい褐色。内面指頭によるナデ。	外側鉛熱赤 黒。内面才 コゲが付着。	
23	+	+	11.8 (12.85) — —	長石、チャート、結晶片岩紋を含む。内外面にぶい黄褐色。内外面器面調整不明。	外側焼ける。	
24	+	+	— (8.45) — 4.6	石英粗重巻、結晶片岩粒を含む。器表の荒れが激しい。上げ底風。		
25	+	壺底	— (5.7) — 9.8	石英、チャート、他の細粒粒砂を含む。		
26	+	甕	— (15.5) — 3.2	石英、チャート、雲母を含む。外側タテハケ。内面ヨコナデ。上げ底風。縁部をつまみ出す。		
27	+	+	— (12.2) — 2.4	結晶片岩を多く含む。外側タテハケ。	外側焼ける。	
28	+	+	13.0 (8.4) — —	長石、結晶片岩粒を含む。内面にぶい褐色。外側にぶい黄褐色。口唇面取りでわずかに上方につまむ。内外面ナデ。		
29	+	+	— (6.3) — 2.8	石英、チャート他の砂粒を含む。内外にぶい黄褐色。内・外ナデ調整。上げ底。		
30	+	+	— (4.1) — 5.0	チャート、長石他の砂粒を含む。内面黒褐色。外側にぶい黄褐色。内面ナデ。外側ハケ調整。少し上げ底。縁部を指頭でつまみ出す。		
31	+	+	— (5.3) — 2.8	長石、他の細粒粒砂を含む。内面にぶい黄褐色。外側灰黄褐色。外側タテハケ。内面ナデ。底部上げ底で指頭でつまみ出す。		
32	+	+	— (6.2) — 3.65	内面黄褐色。 辰石、石英、他の細粒粒砂を含む。外側ナデか。底部はわずかに上げ底で縁部をつまみ出す。内面下→上のヘラケズリ+指ナデ。		
33	+	+	— (6.5) — 3.15	チャート、石英、長石を含む。にぶい黄褐色。内面指頭圧痕。外側ナデ。上げ底。		
34	+	壺	16.0 (9.2) — —	長石、チャート、他の細粒粒砂を含む。内面橙色。外側にぶい橙色。口唇をわずかに上下に拡張。縁部外側タテ、内面ヨコ方向ハケ。胴部外側ナデか。		

遺物観察表

排団番号	出土地点	器種	口径 法長 (cm)	特 徴	備 考
35	ST 1	鉢	— (9.8) — 6.5	長石、石英、チャート他の粗粒砂を含む。内外面ハケ+ナデ(ハケは消えている)。底部はしっかりした台形状です。	
36	*	*	10.4 7.5 — 5.0	チャートの粗粒砂を多く含む。内面橙色、外表面浅黄色。内外ナデ。上げ底風。外縁を指頭でつまみ出す。	
37	*	*	9.0 (5.8) — —	石英、チャート、結晶片岩を含む。内面にぶい黄褐色、外表面明黄褐色。内外面ナデ。	
38	*	*	10.2 6.4 — 3.9	チャートの粗粒砂、雲母を含む。内面は浅黄褐色、外面にぶい黄褐色。外表面ナデ。高台状でしっかりした脚を有す。	
39	*	*	11.1 6.9 — —	石英、結晶片岩、長石の粗粒砂を含む。底部わずかに上げ底、外縁を指頭でつまみ出す。内外面ナデ。	
40	*	高杯	5.0 15.0 (7.1) —	石英、長石の粗粒砂を多く含む。内面灰黄色、外表面橙色。内外面ナデ。	
41	*	*	14.7 (12.3) — —	結晶片岩、長石の粗粒砂を多く含む。内面橙色、外・断面にぶい橙色。内外面ナデの荒れが激しい。	
42	*	*	— (9.0) — —	長石、チャート他の砂粒を含む。内外面にぶい橙色。内外面ナデ調整。	
43	*	*	— (8.7) — 12.2	チャートの粗粒砂を少量含む。内面橙色。外表面ハケ。底部内面ハケ、柱状部内面ナデ。	
44	*	石忽丁	全長 9.0 全幅 5.4 全厚 0.7 全重 29.0 g	結晶片岩。上・下に刃部。上下共に溝曲。側縁に弱い抉り。	
45	*	*	全長 8.0 全幅 4.0 全厚 0.8 全重 42 g	結晶片岩。側縁に弱い抉り。 上・下に刃部。下がしっかりしており、コーングロスが認められる。	
46	*	*	全長 8.5 全幅 4.3 全厚 1.2 全重 45 g	結晶片岩。 上・下に刃部。わずかに内湾。 側縁に弱い抉り。	
47	*	*	全長 7.3 全幅 4.0 全厚 0.55 全重 25 g	結晶片岩。 上・下に刃部。 側縁に3角の抉り。	
48	*	*	全長 8.0 全幅 4.0 全厚 0.9 全重 37 g	結晶片岩。 上・下に刃部。 抉りなし。	
49	*	*	全長 5.53 全幅 5.12 全厚 0.56 全重 24.4 g	結晶片岩。上・下に刃部。	
50	*	石錐	全長 12 全幅 4.2 全厚 1.5 全重 135.3 g	みかぶ緑色岩。 打ち欠き石錐。	
51	ST 2	甕	13.6 (14.0) — —	チャート。風化処理を含む。内面浅黄色。外・断面にぶい黄褐色。外表面叩き、内面ハケ+ナデ。	外表面激しく擦ける。

遺物観察表

博覧会号	出土地点	器種	法量 (cm)	特徴	備考
52	ST 2	甕	— (8.5) — 3.8	結晶片岩他の粗粒砂を含む。内外面黄褐色。断面灰色。外面叩き、内面ナデ。	
53	*	鉢	— (8.9) 9.7 —	結晶片岩、チャートの粗粒砂を含む。内面黄褐色。外表面白色。外表面叩き、内面ナデ。調整。	
54	ST 3	甕	— (4.45) — 5.0	結晶片岩、チャート他の粗粒砂を含む。外表面タテハケナデ。内面に爪圧痕あり。	
55	*	*	— (3.6) — 4.6	長石、チャート他の粗粒砂を含む。上げ底底。外表面タテハケ、内面ナデ。	
56	*	甕	— (6.3) — 3.8	結晶片岩粗粒を多く含む。内面灰褐色、外面上ぶい黄褐色。内面ナデ。わずかに上げ底。	外側焼ける。
57	*	*	— (4.4) — 3.0	チャート他の粗粒砂を少許含む。外表面タテハケ、内面指ナデ。	外側少し焼ける。
58	*	石臼丁	全長 6.8 全幅 10.2 全厚 0.9 全重 108.1 g	結晶片岩。長軸線の両方に刃部。両面から剥離。	
59	SK 2	土錐	0.5 — — —	細粒砂を含む。 全長3.75cm、全幅1.5cm。	
60	*	甕	12.85 (12.5) — —	結晶片岩、チャート、長石の粗粒砂を含む。外表面にぶい黄褐色。口唇面取り、口縁内外ヨコナデ。肩部内面に指ナデ。外表面タテハケ。	外側激しく焼ける。
61	SK 4	*	12.5 (16.0) — —	結晶片岩、長石、チャートの小塊、粗粒砂を含む。外表面にぶい黄褐色。口唇面取り、口縁内外ヨコナデ。肩部外表面タテハケ。内面上半タテハケ、下半ナデ。	外側激しく焼ける。
62	*	*	— (8.4) — 4.0	長石、結晶片岩を多く含む。外表面にぶい橙色。外表面タテハケ、内面ナデ。上げ底。	
63	*	*	— (12.0) — (4.0)	石突、長石、結晶片岩粒を含む。外表面ハケナデ。内面指ナデ。	外側焼ける。
64	*	高环	— (7.0) — 14.2	結晶片岩を多く含む。外表面にぶい黄褐色。端部面取り内外ナデ調整。	
65	SK 5	甕	14.0 (4.0) — —	チャート粗粒、長石粗粒を含む。内・断面橙色。外面上ぶい橙色。口縁内外ヨコナデ。	外側焼ける。
66	*	*	— (2.7) — 5.0	チャート、結晶片岩、長石粒を含む。	
67	SK 7	*	— (4.8) — 5.2	結晶片岩他の砂粒を多く含む。内外断面すべて灰色。上げ底。内・外ナデ。	
68	*	*	— (7.2) — 3.2	結晶片岩他の砂粒を多く含む。内面灰色、外面上ぶい黄褐色。内外ナデ。底部外縁つまみ出し。	

遺物観察表

辨団番号	出土地点	器種	口径 法量 (cm)	特 徴	備 考
69	SK 7	壺	17.1 (4.7) — —	チャート。結晶片岩他の粗粒砂を含む。内面灰白色、外面にぶい黄橙色。断面暗緑灰色。口縁端をつまんで強くヨコ方向のナデ。	
70	*	壺	13.3 (9.6) — —	結晶片岩、長石、他の小颗粒砂を含む。内面にぶい黄橙色。外面橙色。口唇面取り。内面指ナデ。外面調整不明。	
71	*	*	— (7.6) — 4.7	石英、チャート、結晶片岩を含む。外面タテハケナデ。内面ナデ。	
72	*	*	9.7 (9.5) —	長石、結晶片岩の粗粒砂を含む。内外面ナデ。	
73	*	壺	— — — — —	チャート、結晶片岩、長石の粗粒を多く含む。口唇面取り、わずかに下方につまみ出す。外面ハケ、内面ナデ調整。	
74	*	壺	— (9.1) — 3.2	結晶片岩他の粗粒砂を含む。外面ハケ調整、内面指ナデ。	外面保ける。
75	*	*	11.0 19.2 — 3.3	結晶片岩他の粗粒砂を含む。外面タテハケ、内面指頭のナデが顯著。上げ底(光沢粘土が剥離したのか)	
76	*	壺	— (8.6) — 9.7	石英、結晶片岩、細粒砂を含む。内面灰白色、外面黄橙色、断面灰白色。外面本日の扱いハケ。内面ナデ。	
77	*	高坏 底	— (1.1) — —	石英、角閃石を含む。内外面橙色。唐破から軽入品の可能性あり。高坏・底が厚く、内面丁寧なハラミガキ。外削に脚接合時の沈挫が残される。	
78	SK 17	壺	16.6 (2.1) — —	結晶片岩、チャート他の粗粒砂を多く含む。内・断面灰色。外面上にぶい黄橙色。口縁端を上方につまみ上げ強いヨコナデ。口縁内外ヨコナデ。	
79	*	鉢	15.1 (10.2) — 5.6	チャート。結晶片岩の粗粒砂を含む。外面タテハケ、内面ナデ。	外面被無骨質。
80	SK 24	甕	13.8 (3.5) — —	長石、石英、結晶片岩紋を含む。内外面橙色。内外面ナデ。	
81	*	*	— — — —	チャート、結晶片岩、石英の粗粒砂を多く含む。内外面上にぶい黄橙色。内・外ナデ調整。	
82	*	壺	— (6.8) — 4.9	結晶片岩の粗粒を多く含む。内外面上にぶい黄橙色。やや上行底。内外面ナデ。	外面保ける。
83	P 56	*	23.8 (4.7) — —	石英、結晶片岩を多く含む。内外面上にぶい橙色。口縫内外ヨコナデ。割部内外調整不明。	
84	包含層 (瓦層)	*	14.0 (14.2) 22.0 —	結晶片岩、石英、長石の粗粒砂を多く含む。内面上にぶい黄橙色。外面にぶい褐色。断面暗灰黄色。内外面、器表の荒れが激しい。	
85	*	*	12.0 (7.6) — —	石英、長石の粗粒砂を含む。内外面上にぶい橙色。内外面器表の荒れがひどい。	外面保ける。

遺物観察表

拂団番号	出土地点	器種	口径 法量 (cm) 器高 羽達 底径	特 徴	備 考
86	包含層 (E層)	甕	— (6.5) — 3.3	結晶片岩、長石、石英他の細粗粒砂を多く含む。内外面黄褐色。底部わずかに上げ底。外底付近に叩き。内面ハケ、外面叩き+ナデ。	外面焼ける。
87	*	*	15.9 12.3 — —	チャート他の細粗粒砂を含む。内外面黄褐色。口唇面取り。外面叩き+ナデ。内面ナデ。	外面焼ける。
88	*	*	11.4 (8.4) 16.8 —	チャート、石英、長石の細粗粒砂を含む。内外面にぶい黄褐色。肩部内外面ハケ、口唇面取り。	外面焼ける。
89	*	*	— (5.8) — 2.5	結晶片岩の小礫、細粒砂を多く含む。内外面灰オリーブ色。わずかに上げ底の小さな底部。内外面器表の荒れが激しい。	胎土は0.5～4.5mmの砂粒。
90	*	*	10.7 (5.7) — —	結晶片岩、長石他の細粗粒砂を含む。内外にぶい灰褐色。外面ナデ、腹内面粗ナデ。口唇は丸くおさめる。	外面焼ける。
91	*	甕底	— (17.0) — 3.8	結晶片岩他の細粒を多く含む。内外面、浅黄褐色。外面タテハケ、内面ナデ。	
92	SK 13	中世 鍋	— (4.9) —	石英颗粒、雲母を多く含む。外面ヨコナデ、腹内面ヨコハケ。	外面焼ける。
93	SK 21	中世 土師 鍋	38.0 (6.0) — —	石英、長石の細粗粒砂を多く含む。内外ナデ。	
94	*	土師器 (15C)	— 22.0 (4.4) — —	石英、長石の粗粗粒砂を多く含む。口唇を丸くおさめ、断面カマボコ状のツバを持つ。内外ナデ。	
95	SK 10	土師 塊	— (1.0) — 6.7	精選された胎土。逆台形状のしっかりした貼付台面を有す。	
96	SK 21	青磁 碗	— (2.8) — 7.0	白色やや粗い胎土。緑褐色の袖が厚くかかる。全面施釉し、外底の袖を蛇ノ目状に削り取る。露胎部褐色。内底印花文。	
97	P 11	土師 杯	— (1.0) — 4.0	精選された胎土。内面にクロロ目顯著。外底糸切り。	
98	P 52	*	— (3.5) — 4.9	精選された胎土。内外面クロロ目顯著。糸切り。	
99	P 38	土鍋	47.0 (11.1) — —	石英、長石、粗粗粒砂を多く含む。内外面ハケ調整を基調とする。	内部の裏部 外面焼ける。
100	包含層 (E層)	甕	14.6 (8.1) — —	石英、結晶片岩他の細粗粒砂を含む。内・外ナデか。	
101	*	*	— (7.4) — 1.6	長石、結晶片岩の細粗粒砂を多く含む。小さな平底、内外ナデ。	0.5～4.0mm の砂粒。
102	*	*	— (6.0) — —	結晶片岩の小礫、他の粗粗粒砂を含む。外面タテハケ。	外面焼ける。

遺物観察表

神社番号	出土地点	器種	法量 (cm)	口様 部断面 式様	特 徴	備 考
103	包含層 (瓦層)	甕	12.6 (6.0) — —	石英、長石の粗粒砂を含む。口様部内外面ヨコナデ、胸内外面ナデ。	外腹僅ける。	
104	*	*	— (12.7) — 3.7	チャート、他の粗粒砂を含む。外面ハケ、内面ナデ。	外腹僅ける。	
105	*	*	— (5.4) — 2.2	石英、長石の粗粒砂を含む。上底外側クテハケ、内面ナデ。	0.5~4.0mm の砂粒。	
106	*	壺	14.2 26.6 — 4.0	チャートの粗粒砂を多く含む。口唇、強いヨコナデ。外面叩き+タテハケ。 内面ナデ。		
107	*	甕	— (6.8) — 1.8	結晶片岩その他の小礫、粗粒砂を多く含む。外底タテハケ、内面ナデ。 細い底部。	0.5~5.0mm の砂粒。	
108	*	壺底	— (6.2) — —	結晶片岩を多く含む。外面タテハケ。内面ナデ。	0.5~5.0mm の砂粒。	
109	*	*	— (7.8) — 4.6	結晶片岩、石英粒を多く含む。底部、上げ底。外面タテハケ。内面ナデ。	0.5~4.0mm の砂粒。	
110	*	鉢	14.5 9.5 — 5.6	結晶片岩、赤色風化繊の砂粒を多く含む。台形状の底部。底盤脇を頂頭で つまむ。内・外器表の荒れが激しい。		
111	*	*	11.4 6.6 — 4.9	石英、赤色風化繊を多く含む。 台形状に張り出した底部、指頭圧痕著。内・外腹ナデか。	0.5~5.0mm の砂粒。	
112	*	甕	— (3.8) — 4.6	結晶片岩、他の小礫、粗粒砂を多く含む。		
113	*	鉢	— (2.9) — 1.9	結晶片岩、他の粗粒砂を含む。外に出張った上げ底状の底盤。	0.5~2.0mm の砂粒。	
114	*	壺底	— (2.5) — 4.8	結晶片岩、石英他の粗粒砂を含む。外面ハケ、内面ナデ。		
115	*	甕	— (4.2) — 5.2	結晶片岩、石英他の粗粒砂を多く含む。外面ハケ、内面ナデ。わずかに 上げ底。	外腹僅ける。	
116	*	高坏	— (7.0) — —	チャート、赤色風化繊の粗粒砂を含む。内・外器表の荒れが激しい。		
117	包含層 (瓦層)	甕	11.2 (3.9) — —	長石、結晶片岩の粗粒砂を多く含む。口唇を上方につまみ上げて横ナデ。		
118	包含層 (瓦層)	土鍋	17.0 (8.0) — —	長石、石英の粗粒砂を含む。口唇丸と口縁下に斬削。カマボコ状のツバ。 内・外ナデ調整。	外腹激しく 窪ける。	
119	*	高坏	— (4.3) — —	長石、石英他の粗粒砂を多く含む。内・外腹ナデ調整。		

遺物観察表

排列番号	出土地点	器種	法蓋 (cm)	口徑 器高 脚径 底径	特徴	備考
120	包含層 (VI層)	鉢	— (4.4) — 4.5	結晶片岩、石英、他の粗粒砂を多く含む。底部は外に張り出す。内・外 面ナデ調整か。	胎土は0.5 ～5.0mmの 砂粒。	
121	*	土鍋	44.6 (10.3) — —	石英、長石の粗粒砂を含む。内・外面ハケ調整。口縁部内・外強いコナ デ。	外面剥ける。	
122	包含層 (VII層)	甕	15.2 (12.5) — —	チャート、赤色風化層の粗粒砂を含む。口唇部強いコナデ。腹外圓押 きとタテハケ。内面ハケ。		
123	*	青磁碗	— — — — —	灰色で、やや粗い胎土。全体ややにごりのある薄緑色。外面丸ノミ状の工 具による溝弁。		
124	*	甕	14.5 (5.0) — —	石英、他の粗粒砂を含む。開墾不明。		
125	*	甕	— (4.6) — 5.0	チャート、結晶片岩他の粗粒砂を含む。内外ナデ。やや上げ底。		
126	*	青白釉 盤	— (1.9) — 6.0	灰色精緻の胎土。透明度のある褐色の胎土。全面施釉、外底に目跡が付着。 内底に花文。		
127	*	青磁碗	17.0 (4.9) — —	灰白色、やや粗い胎土。にごりのある薄緑色の釉。口縁内面に3条の沈線。 外縁コテによる削りの単位明瞭。		
128	*	鉄瓶	— — — —	全長5.1cm、全幅2.3cm、全厚1.0cm 重量10.1g		
129	*	*	— — — —	全長8.5cm、全幅3.0cm、全厚0.6cm 重量13.3g		
130	*	土鍋	— — — —	全長4.6cm、全幅1.6cm、全厚0.5cm 重量8.6g、孔径0.6cm 精選された胎土。		
131	包含層 (V層)	朱付 漆器	13.6 (4.2) — —	明暦付模様、やや褐色気味の粗い胎土。16世紀頃の所産。内面1条の堀線。 外表面形化した波譲文と芭蕉文。		
132	*	青磁碗	14.0 3.7 — —	灰色精緻の胎土。滑りのある緑色釉が厚くかかる。		
133	包含層 (IV層)	*	14.4 (5.2) — —	胎土は灰色でやや粗いつくり。薄緑色の釉。外縁は錦辯弁文。		
134	*	甕	— (4.1) — 4.2	チャート他の粗粒砂を多く含む。外縁叩き、内面ナデ。		
135	*	中世 鉢	21.0 (7.4) — —	長石、石英、他の粗粒砂を含む。口唇丸い。LJ縁下に扁平なツバ。内外 面ナデ。	ツバ下外縁 激しく剥け る。	
136	*	石鏡	全長 3.7cm 全幅 2.4cm 全厚 0.4cm 重量 3.7g	チャート。先端、基部はやや非対象。		

遺物観察表

揮出番号	出土地点	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	特 徴	備 考
137	包含層 (Ⅲ層)	甕	15.9 (5.0) — —	石英、長石、チャートの粗粒砂を多く含む。口唇面取り。 内・外側器表の荒れが激しく調整不明。		
138	*	鉢	— (4.9) — 5.6	石英他の粗粒砂を含む。断面台形状の底部。内・外側ナデ調整。	0.5~7.0mm 大の砂粒。	
139	*	高環脚	— (6.3) — —	長石、チャート他の粗粒砂を含む。		
140	*	青磁碗	15.8 (3.2) — —	灰色やや粗い胎土。透明度の高い釉。真入りあり。		
141	*	壺	12.8 4.9 — 5.4	精選された胎土。内・外側口クロロ顯著。		
142	*	脚付鉢	— (3.6) — —	長石、チャートの粗粒砂を多く含む。		
143	*	古代 甕	22.0 2.0 — —	石英、長石他の粗粒砂を含む。にぶい橙色。内・外側器表の荒れが激しい。	0.5~4.0mm の砂粒。	
144	*	白磁皿	11.0 (1.6) — —	口ハゲ。白色でやや粗い胎土。		
145	*	甕	— (7.9) — 3.8	石英の小礫、粗粒砂を多く含む。 内・外側ナデ調整。 外側器表の荒れが激しい。		
146	*	青磁	— (2.8) — 4.8	褐色のやや粗い胎土。全面施釉。灰オリーブ色。外底乾ノ目には抽きき。		
147	*	青磁碗	12.6 (3.4) — —	白色で精緻な胎土。ややにごりのある薄緑色の釉。		
148	*	皿	— (3.2) — 7.0	白色やや粗い胎土。絵済の釉が厚くかかる。		
149	*	土師皿	— (2.4) — 7.3	精選された胎土。にぶい黄褐色。内・外ナデ。		
150	*	土鍋	— — — —	長石、石英の粗粒砂を含む。口縁下に下鍊氣味のツバ。内外ナデ。	外側焼ける。	
151	*	白磁 小皿	— (2.8) — 4.2	白色やや粗い胎土。内底中央部が膨らむ。外面中位あたりまで施釉。		
152	*	青磁碗	— (2.85) — 5.2	灰色のやや粗い胎土。透明度のある灰色釉。外底、高台内面は施釉。 先印あり。		
153	包含層	青磁皿	— (1.4) — 4.4	灰色のやや粗い胎土。透明度のある緑色釉。高台内面まで施釉。		

遺物観察表

辨認番号	出土地点	器種	口径 法量 (cm)	特 徴	備 考
154	包合層	甕		長石、石英を含む。内外面ナガ調整。胴部内面に上位模様ナダ。口唇上下、段部、胴部削り出し突帯上覗み。美術を強調するように上下に細い沈線。	上腹部7と8本の山形文
155	*	*	14.4 — — —	チャート、結晶片岩、長石を含む。口縁内外ヨコナダ。上側部外縁ヨコハケ。内面指頭圧痕あり。	
156	*	*	14.75 (13.2) —	チャート、結晶片岩の粗粒砂を多く含む。口唇面取り。胴外側タテハケ。内面上側部付近まで下→上のヘラ削りとナダ調整。	外縁焼ける。
157	*	*	13.0 (7.2) — —	結晶片岩の粗粒砂を多く含む。口唇面取り。口縁内外ハケ。胴部外側ハケ。内面に指頭圧痕著。	外縁激しく焼ける。
158	*	*	15.6 (7.2) — —	結晶片岩、チャートの粗粒砂を多く含む。口唇面取り。口縁内面ヨコハケ。外縁ヨコナダ。胴外側タテハケ。内面は指ナダ。	
159	*	鉢	24.0 (5.9) — —	長石の粗粒砂を含む。全体灰色。束縛系のコネ体。	
160	*	白磁皿	14.1 (2.1) —	灰色精緻な胎土。口縁外反。	
161	*	鉢	— (6.0) — 4.2	結晶片岩、他の粗粒砂を含む。器表の荒れがひどい。	
162	*	土師壺	12.4 (3.0) —	精選された胎土。ロクロ成形。	内面焼ける。 灯明用。
163	*	*	9.8 5.4 — 4.8	精選された胎土。黄褐色でロクロ成形。糸切り。	
164	*	鉢	— (2.8) — 6.6	結晶片岩、他の粗粒砂を含む。 断面台形の底部。外縁指頭圧痕あり。	
165	*	土師器 壺	— (1.6) — 3.6	精選された胎土。糸切り痕あり。ロクロ成形。	
166	*	青磁碗	— (3.85) — 4.8	全体灰色で精緻な胎土。縁溝の輪が厚くかかる。高台内面までかかり外底は筋ノ目削り取る。高台内面に呂痕が不器。細選分模様。	
167	*	青磁皿	— (1.6) 8.6	灰色堅緻な胎土。内面鉄釉、外縁露胎。台形状の削り出し高台。	外縁焼ける。
168	*	青磁碗	13.4 (4.0) — —	灰白色のやや粗い胎土。粗選糸あり。 薄緑色の絞・貫入あり。	
169	*	*	14.6 (4.3) — —	白色やや粗い胎土。内面には細選糸。 薄緑色の絞・貫入。	
170	*	石包丁	全長 4.75 全幅 8.7 全厚 0.7 全重 40.8 g	結晶片岩製。片方の短片に弱い抉りあり。 両面から刃部をつくり出し、やや外済気味。	

# 写 真 図 版



調査前風景

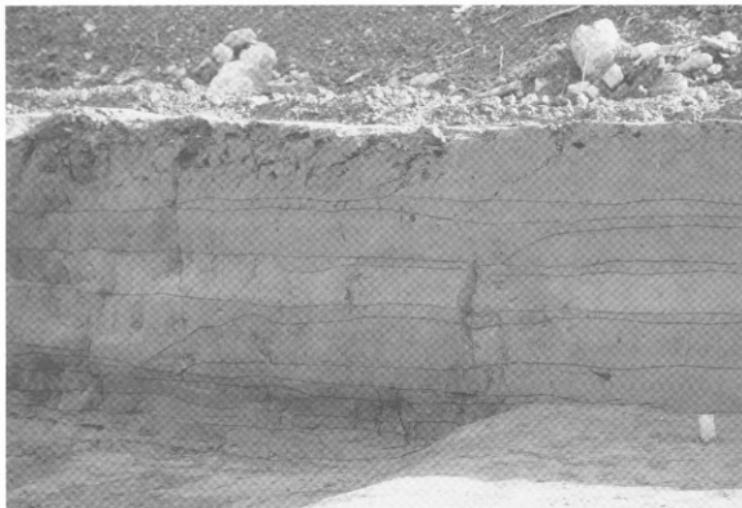


試掘調査 トレンチ設定状況

PL 2



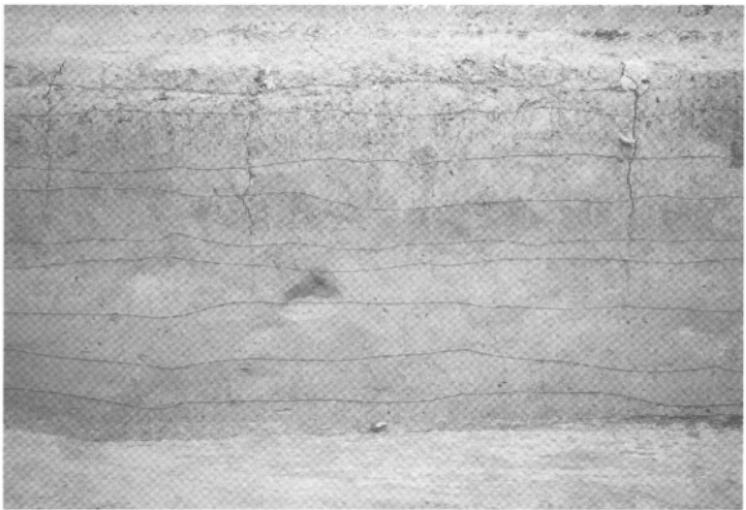
調査区南壁A-B セクション



同上



調査区東壁 C-D セクション



同上

PL 4



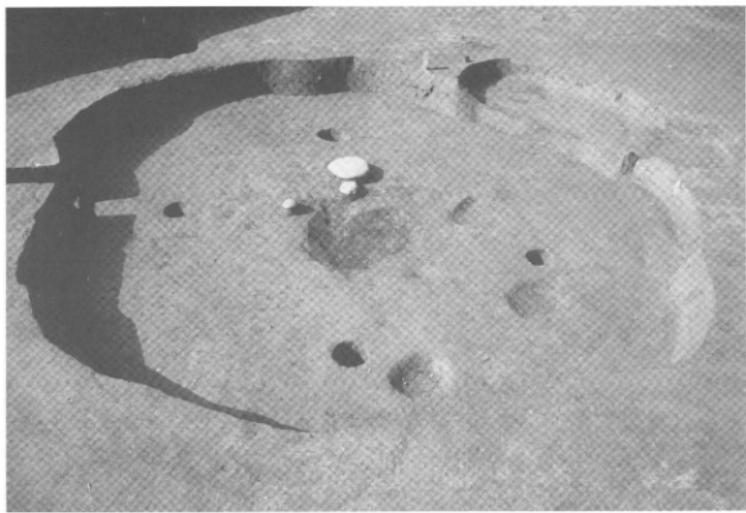
ST 1 検出状況（西から）



ST 1 発掘作業風景

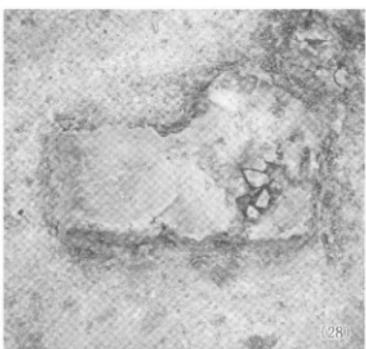
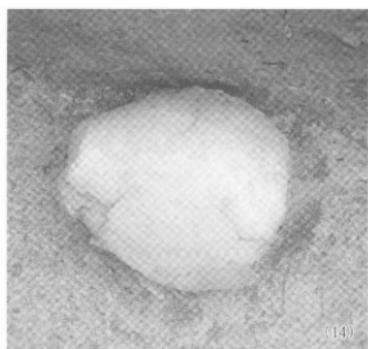
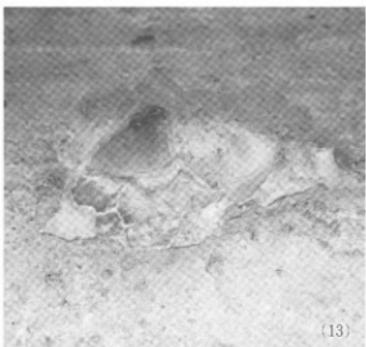


ST 1 遺物出土状況（北から）



ST 1 完掘状況（南から）

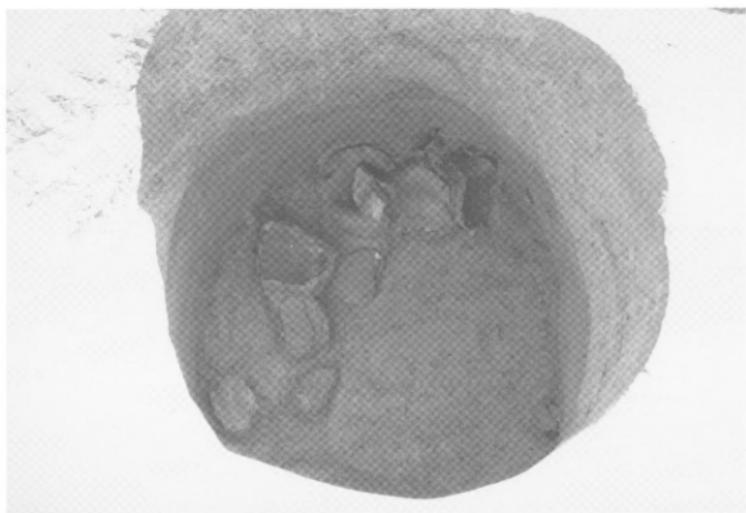
PL 6



ST 1 遗物出土状况

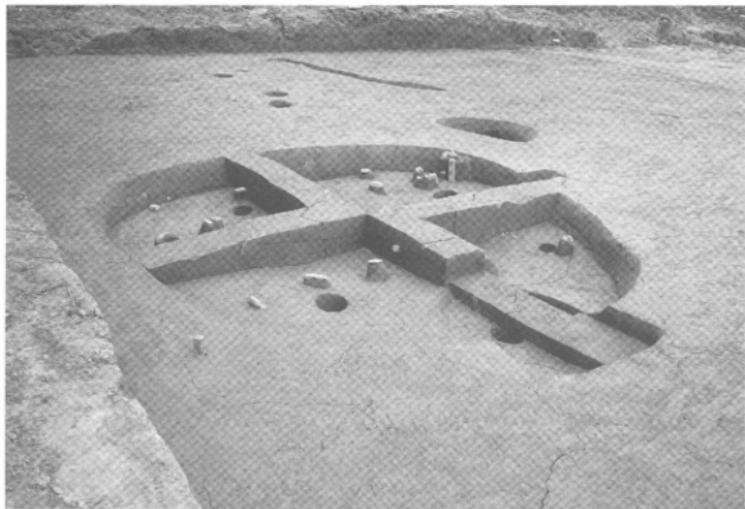


ST 1 と SK 4 の位置関係



SK 4 遺物出土状況

PL 8



ST 2 セクション（西から）



ST 2 完掘状況（南西から）



ST 3 完掘状況（南西から）

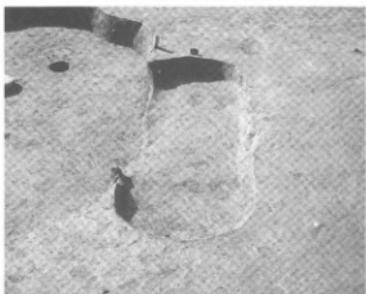


同上（北東から）

PL 10



SK 1 完掘状況



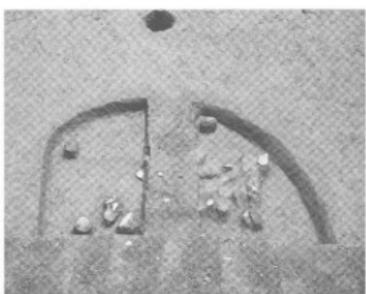
SK 3 完掘状況



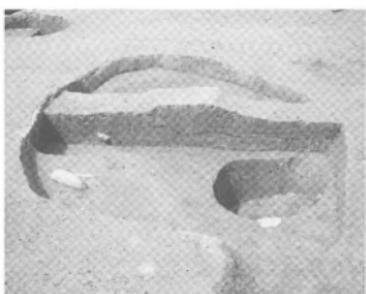
SK 5 完掘状況



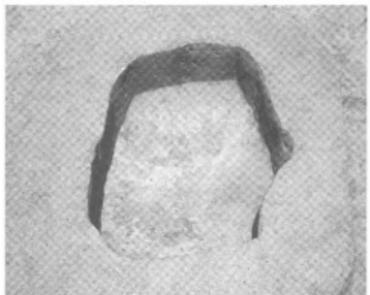
SK 6



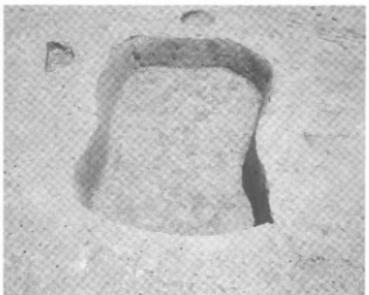
SK 7 遺物出土状況



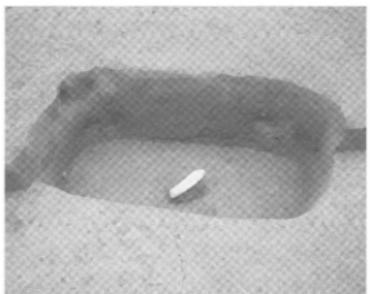
SK 13セクション



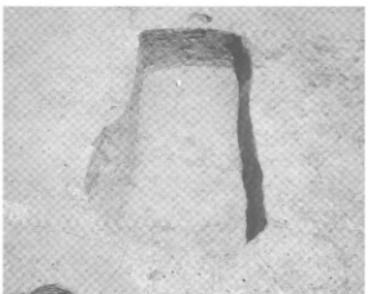
SK 15完掘状况



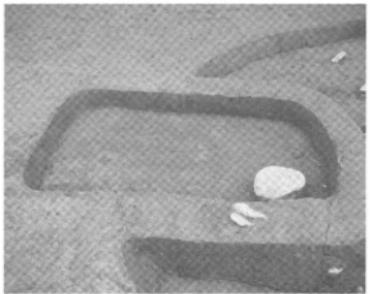
SK 16完掘状况



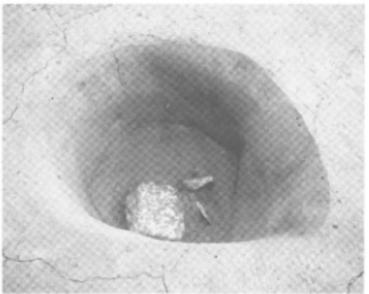
SK 18完掘状况



SK 20完掘状况



SK 22完掘状况



SK 24完掘状况

PL 12



包含層IX層上面集中出土遺物出土狀況



同上 (84)



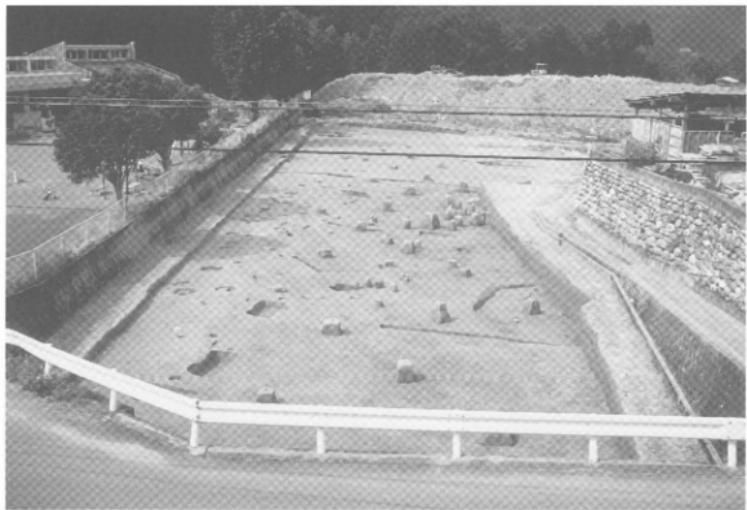
同上 (90)



同上 (86) (88)

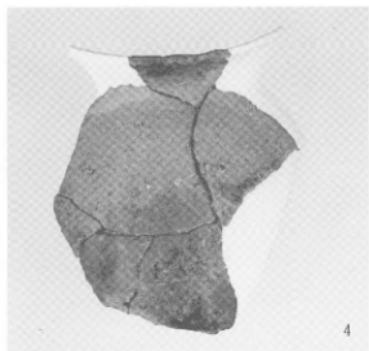


調査区全景（北東から）



同上（南西から）

PL 14



4



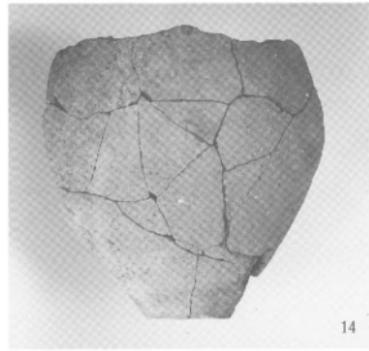
7



11



13



14



15

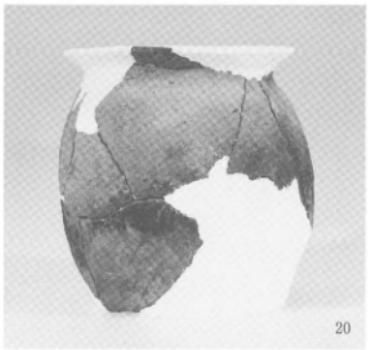
ST 1 (4・7・11・13・14・15) 出土の遺物



16



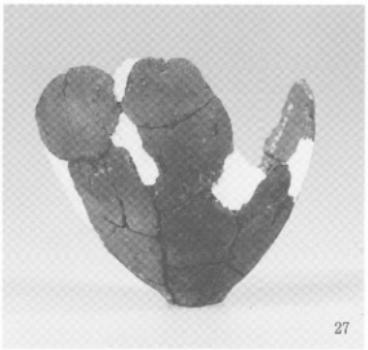
19



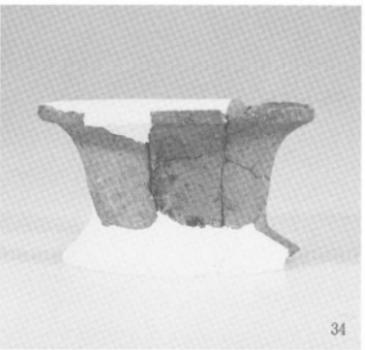
20



26



27



34

ST 1 (16・19・20・26・27・34) 出土の遺物

PL 16



35



36



39



40



41



43

ST 1 (35・36・39・40・41・43) 出土の遺物



51



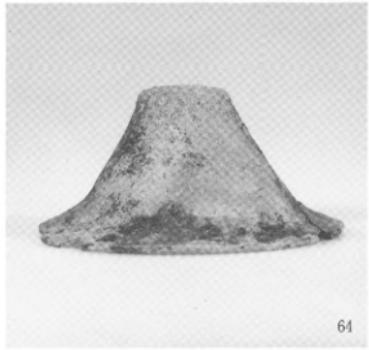
52



60



61



64



75

ST 2 (51・52)・SK 2 (60)・SK 4 (61・64)・SK 7 (75) 出土の遺物